

光の国の帝王と影の国 の女王

アデノシン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

光が生まれ、影が生まれた

そのふたつは決して交わることのない

そのふたつは決して離れることのない

拒絶し合い、求め合う、矛盾を孕んだものであつた

光は形を得て、影の國の帝王となり「ソラスハ」の名を得た

影は形を得て、影の國の女王となり「スカサハ」の名を得た

時は悠久を彷徨いながらも、流れていく

彼らは時を知らないが、彼らを取り巻くものは時に生きるもの

周りに時を動かされるかのよう

歯車が絡み絡み合い動き始めた

これから語るのは、光と影が交差するほんのひと時の物語

とある少年の長き旅路は

神々からすれば瞬き一つ

それでもその瞬きの間に

決して忘れ得ぬ時を見る

この作品はとある方より頂いたものを軸とし、連載化したものです。

オリジナル主人公、オリジナル展開といった原作とは異なる部分が多くあります。

目

次

対なる兄妹

光の交差

光の屈折

死と生と

影の使徒

迫るもの

82 62 47 28 16 1

対なる兄妹

「愛しき我が光よ。

この妹の願いを、叶えてはくれないだろうか」

「却下だ。我が影よ。

お前の暇潰しにこれ以上戦力を消費するわけにはいかん」

「暇潰しとは酷いな。

私はこんなにも飢えているというのに」

「おや、お気に入りの弟子はどうした?

アレはお前の渴望を満たす可能性を秘めるもの。

暇潰しには丁度良いだろう

「ああ、アレはもうかえつた。

再び見えることはあるまい」

「……わからんぞ。縁は繋がれた。

またいざれ見る時が来よう

赤にも紫にも見える真直ぐな髪を持つその女は、影の国に流れる唯一の池を覗き込

み、懇願するように呟いた。

青にも緑にも見える緩やかな髪を持つその男は、光の国に流れる一つの湖を覗き込み、微笑みを浮かべ言つた。

影の国に女王として君臨する女は、武芸を極め神をも殺した恐ろしきもの。そんな彼女には、多くの弟子がいるが、その中でも飛び抜けて上等な弟子がいることを男は『よく』知っていた。光と影は交わることはないが、こうして間接的に会うことは可能であるので、彼らは良く言葉を交わしていた。だからこそ、その“お気に入り”的存在を知った時、男は喜んだのだ。少しばかり明るくなつたうつくしき顔を、見た時は。

しかし、時は移ろい人を変える。どうやらそのお気に入りは英雄となり英靈なるものになつてゐるらしい。もしこの妹が“死ぬ”ことができるのなら、英靈となり、かのものと相まみえることもできるのだが、と心の中で哀れんだ兄は、静かに目を伏せる。

「——時は、近い」

「……ならば、もし兄上の言葉が正しいのならば、私はまた貴方にも会うことができるだろうか」

「ははっ、このような口煩い兄に会いたいとは。

我が妹ながら可愛いものだ。なあ、スカサハよ」

「ほう、それを私に聞くのか？ 我が兄ソラスハよ。」

「ああ。愚問だつたな」

光輝くその微笑みは、女にとつては眩し過ぎるものであつた。
相容れないとわかつていても求めずにはいられない、尊きもの。
女が思わず手を伸ばす。

——ちやぽん、と水が跳ねた。

ぶつりと途絶えた通信に、ソラスハはその端麗なる顔を曇らせる。あの暗く冷たい影
の国でひとり生きる妹を、彼は案じていた。

「そう再会の時は近い。……そうお前とも、な。我が弟子よ」
天高く上る陽が燦燦と差し込む光溢れる園で、男は目を閉じる。
思い浮かぶのは1人の少年の顔だつた——。

光の国の主として君臨するソラスハが、その少年を拾つたのはもう随分前のことだ。ソラスハは、影の国の女王スカサハとは違ひ自由に動き回ることができる身である。退屈だと感じれば、分霊として天界や地界そして現世に降り立ち満喫するという自由が許されていた。あまり長期間滞在すると、彼の口煩い部下によつて連れ戻されるが、そんなことは気にも留めず、自由気ままにありとあらゆる場所にちよつかいを出していたのだ。少年と出会つたのも、そんな放浪の旅の中である。

「——アンタ、何者だ」

「俺か？俺は……まあ、ただの旅人だよ」

「旅人？こんなところに？……命が惜しければ冗談は辞めた方が良い」

「冗談なんかじやないさ。俺はただ……おつと、」

「アンタみたいなの、もう何人も見ているんだ。今更騙されやしない……!!」

「ほう、弓使いか。いいだろう。お前の弓裁き見せてみろ」

「っ！余裕でいられるのも、今のうちだ……!!」

乾いた赤い大地の広がる地、即ち砂漠でソラスハは突如姿を現した薄汚れた少年に弓矢を向けられていた。目を合わせた瞬間に、少年の目に似つかわしくない影が差し込んだかと思うと、少し離れた場所にいたソラスハに、いつの間に番えたのだろう矢を放つてきたのだ。

「この国の民のためだ。消えてもらおう……!!」

「やれやれ。話を聞く気はない、か」

何やら面倒なことが起きているらしいことは、少年の口ぶりと顔付きを見て察したが、詳しく話を聞くことはできないだろう。とはいって、このままやられっぱなしでいられる性格ではなかつた。やられてやり返すは当然だが、そもそも武器を向けて来たことを後悔させるタイプの男であつた。

ソラスハが軽く手を掲げるとその手には剣が握られていた。そして、剣を薙ぎ矢らしきものを弾く。が、その矢は“ただの矢”ではなかつた。氣付いた時には既に遅く、ソラスハの直ぐ横で強烈な魔力が弾け爆発が起きる。ソラスハを中心とし、次々と起こる爆発の連鎖を見て少年は仕留めたことを確信したのだろう。興味を無くしたように去ろうと踵を返した……。

「——羨のなつていないガキだな」

ゾク、と少年の背筋が、肌が、泡立つ。

地を這うような声に一瞬にして動きを止められる。それから先は何があつたかわからなかつた。気が付けば少年は地面に倒れ、完全に動きを封じられていたのである。

「お前は目が良いのだろう？　なら、喧嘩を売る相手ぐらい見極めたらどうだ」

赤焼けた砂に体を沈めた少年に構うことなく、ソラスハは去ろうと背を向ける。しか

しそれは失敗に終わった。ぐい、とソラスハのロープの端を掴むものがいたのだ。

それは、一蹴でもすれば容易く振り解けるほど弱い力であつた。しかしそれでも、暫くは立てないくらいに痛めつけた少年が必死に己のロープを掴み、首を持ち上げて、睨み付けていたのだ。ソラスハは、冷えた目で少年を見下ろす。

「……ま、て、」

「ほう？　まだ動けるか」

「……おれ、を」

「俺を、……」

——俺を、鍛えてくれ……!!

力が……っ、必要なんだ！」

強い、瞳だつた。灰色を帯びた金色の瞳は、死んでいるようで死んではない。少年は、ソラスハを見上げて必死に吠え立てる。震える手、震える体、だがその声に震えも惑いもなかつた。

「脆弱人の子よ、何故力を願う？」

「……救いたいんだ」

「ほう？　弱き力で、何を救うというのか」

「つ！」

「それに俺は弟子を取らん」

「……構わない。アンタがそうなら、無理矢理にでも付いていくだけだ」

「随分と威勢が良いな。お前の守りたいものにはそれだけの価値があるというのか」

「……つ。ああ、そう……だ」

「ふむ——」

光の王は蛮勇を好んだ。何時如何なる時も無謀こそが道を切り拓くことを知っていたから。たとえそれが、戦うものの身を削るとしても、それこそが美しいと考えていた。少年の瞳に宿る暗い光に、ソラスハは笑つた——。

それからというもの、ソラスハは砂漠の地で少年を鍛え続けたのだ。
といつても、彼にとつてはほんの戯れだが、少年にとつては生死の狭間をいく鍛錬で
あつた。

まずソラスハは少年の魔力を封じると、砂漠に住まう巨大蠍の群れの中に叩き込んで。
「どうした？ 動かなければ死ぬぞ」

「つ!?こんな……！無茶苦茶だ……!?」

「ふふ、無茶苦茶な師に付いた自分を呪え」

「ぐ……!!」

「動きが荒過ぎる。己が情けないか？悔しいか？」

「それならば——己を殺せば良い。それは邪魔なものだ。」

「1人1人お前の中のお前を葬ることができれば、そこから這い上がるだろうよ」

「……!!」

「今、お前の周りに共に戦う味方も守るべきものも何もない。

「ならシロウよ。お前は一体何のために戦う？」

「……。俺、は」

堅い甲冑に覆われた体は、少年の放つ剣や弓を容易く弾く。それでも尚立ち向かう少年の足元には、折れた剣が無数に広がっていた。少年は無限に近く武器を生成できる技を取得していた。しかし、切れなくては意味がないのだ。柔い剣では蠍にダメージを与えるどころか、傷1つ負わせるることはできない。今まで積み上げて来た剣術も、絶対の自信があつた弓術も、何もかも通じないのである。

「相手はそれこそ砂漠の何処にでも相手だ。

まあちよつとばかり強化してはあるがな。」

此処で折れるなら、折れてしまつた方が早いぞ。

……足元を見る。それはお前の心だ』

少年の足元には、ぽつきりと真ん中から折れた剣が刺さつていた。
じつと折れた剣を見つめる少年の隙を付くように、蠍の毒を孕んだ尾が振り落とされ
ようとする。

「守ることで力を発揮するというのなら、まず自分で自分を守つてみろ。

たとえ殺したいほど憎いものであつても。死に逝くものをお前は見捨てるのか？」

ソラスハの抑揚を抑えた声音が少年の心を穿つ。

少年には、彼の静かな言葉が乾いた大地に染み入る水のように思えた。

——自分の掌を見る。

それは、幾つもの理想を取りこぼした小さな手だつた。

——自分の剣を見る。

それは、幾つもの夢想を打ち碎いて来た柔い鉄だつた。

——自分の師を見る。

それは、幾つもの憧れをひと塊にしたような人だつた。

「ああ、なんだ。そうだつたのか」

ぱき、と何かが碎けるような音が聞こえた気がした。
ぎり、と何かが軋みをあげる音が聴こえた気がした。

「シロウ……？」

ソラスハが少年の異変に気付き、その名を呼ぶ。

少年の頭上には鋭い蠍の尾が迫っていたが、彼はふと笑みを浮かべた。
穏やかな優しいそれに、ソラスハも思わず目を見開く。

そんなソラスハの表情を見て少年は思った。

この男に矢を剣を向けた時、少年は何も感じなかつた。そうやつて誰かのために誰か
を殺すことを厭うことはなかつたから。いや、何も感じなくなつていたといつた方が正
しいか。

だが、疲弊し擦り減つた心は、濁つた目は、突然現れたこのソラスハという男によつ
て、再び覚醒させられた。惰眠を貪つているところに氷水をぶつかれたかのような
酷い目覚ましであつたが、少年は確かに、目覚めたのだ。

しょうげき

足元で無残に折れた剣を、手に取る。

「違うさ、師匠。俺はシロウではない。

——エミヤだ」

振り向きざまに放たれた一閃は、鋼鉄の如き蠍の尾を切り裂いた。

それからはあつという間であつた。窮地に追いやられた少年は土壇場で息を吹き返し、蠍の巣から生還を果たす。それは、少年が生涯忘ることのないであろう日であつた。

汚泥に満ちた底なし沼から解放されたような、心地の良い日であつた。
しかしである。解放感に浸る少年は忘れていた。

少年が倒した蠍など、砂漠エリアの雑魚敵なのである。実は無慈悲な師匠の手でどんな強化がなされていたのだが、当の師匠が雑魚だといえば雑魚なのだ。

全ての力を解放し砂に埋まる勢いで倒れ込んだ弟子に、ソラスハは溜息を吐くと、なんとその襟元を掴み上げたのである。

「痛つ!? し、師匠!? ま、まさか……!」

「この程度で情けないな。俺を師と呼ぶならば、たとえ心臓を穿たれようとも立ち上がり見てせろ」

「……！」

「どうやら、お前は極限まで追い込んだ方が良いタイプらしい。となれば俺も鬼にならざるを得ないであろう?」

「ならずとも似たようなものじやないか。……あ」

「ふふ。そうか、お前も修行が足りないと思つていたなら上等。

さて次はどれにするか」

エミヤの戦いを見て、ソラスハのスイツチが入つてしまつたらしい。光の顔にうつくしい笑みが浮かぶ。やつてしまつた、とエミヤは顔面を蒼白にするが、もう遅い。

かくして、まさしく無茶ぶりというべき血も涙もない修行の旅は始まった。

弟子を思うばかりに張り切つてしまつたソラスハは、ありとあらゆる残虐にして凶悪なものと戦わせ、精霊だろうが神であろうが、腕の立つものの所にエミヤを放り込んだ。ある青年は、この時を振り返ると決まって遠い目をする。——あれはまさに鬼畜の極みだと。そんなこんなで過酷極まりない日々も、過ぎてしまえば早いものである。

いつしかソラスハは少年を弟子と認め、少年もまたソラスハを慕うようになつていた。

その出会いは奇跡とも呼べた。

しかしながら、突然の出会いは突然の別れを象徴するものだ。

砂漠に降る雨のように突然に姿を現したソラスハは、ある日突然にエミヤに別れを告

げる。

「明日最後の試練を与えるよ」

「……最後、」

「ああ、よく頑張ったな。」

「こ」まで俺の扱きに付いてきたのは、お前を除いて2人だけだよ」

「……その2人は、余程の強者か、それとも余程の狂人か」

「ははっ、お前も仲間入りさ。祝福するよ」

朽ち落ちた瓦礫に腰を下ろしたソラスハは、静かに“最後”を告げた。

文句を垂れ流しながらも根を上げずに此処まで付いて来た弟子に、相変わらず穏やかな笑みを湛えた師は、静かに空を仰ぐ。エミヤはまだ驚き動搖するしかなかつた。

「お前はこれから成さねばならないことがあるようだ」

「え？」

「星が告げている。お前の運命が変わる時が近いと」

夜の帳が落ち、砂漠に極寒の時間がやつて来る。

一時の間身を落ち着かせるため、砂に埋もれ眠つていた小さな遺跡を拠点とした生活も終わりを迎えるようだと、ソラスハは笑う。宝石を碎いて散らばせたような夜空を見上げ、彼は弟子に訪れようとしている運命を告げた。

「お前はその運命の果てで、掛け替えのないものを得る。

そしてそれが新たな運命を切り開くだろう。……俺の役目は終わる」

「師匠……？ な、にを……！」

「師とは導だ。お前のゆく道に微妙でも光が灯るように、力を知恵を魔術を教え与えるもの。しかし俺にも与えられぬものはある。……それを与えるものは俺ではない」

「いやだ！ 俺は、まだ貴方に……！」

「まあ、そう先走るな。免許皆伝とは言つていない」

「え……？」

「言つただろう？ 今までのは初步の初步。

まだまだ俺もイジメ……じやなかつた、扱きたりないつてことだ」

「し、師匠……！」

何かとんでもない言葉が聞こえた気がするが、幸か不幸か、突然過ぎる別れの宣告に、ありとあらゆる衝撃を受けたエミヤの耳に入ることはなかつた――。

程なくして、ソラスハは光の国へと戻り、長い修行を経て青年となつた少年は新たな

戦いへと踏み出していったのである。その手に――祝福された弓矢、蒼の弓を握り締めて。

それからいくつもの運命^{はぐるま}が回った。光の国を統べるものとして君臨し、光の門を守護し続けてきた男は、相変わらず放浪を続けながらもその役目を果たし続けてきた。男は気付かなかつた。いや気付いていたのかかもしれない。自らが“彼ら”と関わることで、いつしかソラスハもまた、徐々に運命の波に飲み込まれていたことを。そして時は現代、そう2000年と少しを迎える――。

光の交差

光の起源を説こうとすれば、それこそ地球の、いや宇宙や太陽の誕生まで遡る。光の国の誕生はそれより歴史は浅いが、それでも神代の時代には存在したのだと“ある伝説”には記されていた。

彼の妹であり影の国の女王であるスカサハの武勇伝等々は“アルスター物語群”に書き記されており、影の国を統べるものとして、クー・フーリンの師匠として、その存在を後世に伝えている。しかし、彼女の兄であり光の国の帝王であるソラスハの存在を明確に伝えるものは“存在しない”。

故に、もはや歴史としてソラスハの名を知ることは不可能であり、その存在を知り得るのは、彼と直接武器を、言葉を、交わしたものだけに限られるのだ。

——現代

人が誕生してから2000年と少し。

神々から火を得た人間はその文明を華々しく開花させ、あつという間にこれほどの文化を築き上げた。高層ビルが立ち並ぶ街を歩きながら男は慣れた様子で、最近出来たばかりだという洒落たカフェに入していく。

いつも着ているローブを脱いで、街並みに合った服装をしている男だが、その姿は周りからすれば浮いていた。あの影の国の女王の兄だというに相応しい美貌とスタイルを兼ね備えた彼の登場に、見惚れるを通り越して驚愕の視線が注がれる。当の本人は慣れたもので、涼しい顔で適当に注文をすると、最近流行りだというドリンクを片手に席に着いた。

「また現世こゝの世に来ていたのかい、ソラスハ」

「ふふ、お前には言われたくないセリフだな。ソロ……」

「あーあー!! どうやらキミには、もう一度自己紹介が必要なようだね!!」

「ああすまない、ロマニ」

「もういつもキミは……。もしかしてわざとやつていないかい?」

「何を言う。親愛なる友を揶揄うなど面白いことをする筈がないだろう」

「知つてた、知つてたよ! その清廉潔白おだやかな面かおの裏には、とんでもない加虐心ほんしょうが潜んでるつてこと! 今までボクがどれだけそれの……ああもう思い出すだけで頭が痛くな

からだ

「まあ落ち着け。 そう騒ぐと老体に障るぞ」

「ぐぐつ、誰のせいだと思つて いるんだい……！」

それに今なんか失礼な言葉が聞こえた気がするんだけど

「難聴か？ 幾千、幾万もの民の声を聞き続けたその耳が、ついに耄碌したとは。

人の体というものは実に柔いものだな」

「あーそうだね！ 難聴かもね！」

だからキミの言葉も聞こえないなー！」

カツカツと靴を鳴らす音が聞こえたかと思うと、桃色の髪が特徴的な男がソラスハの向かいの席に腰を下ろした。 そうして、ほんわりとした容姿に似合いの口調で声を掛けってきたが、ソラスハから次々と発せられる悪戯な言葉にあつという間に崩される。

綿飴を思わせるふわふわとした髪を乱し、ころころと表情を変える男に、ソラスハは愉快そうに口角を上げた。 飛び交う軽口からわかる通り、彼らは長年の友人であつた。

「お前も随分と楽しんでいるようじゃないか」

「……あのねえ、ボクだって遊んでいるわけじゃないんだからね」

「おや、そうなのか？」

「本気で不思議そうな顔されると傷つくなあ。

今だつて超過密スケジュールの合間を縫つて、キミに会いに来てるんだからね」

「それは光栄だ。たとえ、単にキミに茶飲み友達がいないだけの話であつてもね」「うつ！そ、そんなことないやい！」

旧知の友との会話を弾ませつつソラスハは、向かいに座った桃色髪の男に視線を投げる。そして頬杖を付くと、少しばかり首を傾げた。その仕草が、言外に用件を問うものであることに気付いた桃色髪の男は深い溜息を吐くと、柔らかな表情を鋭利なものへと変えた。

「ソラスハ。キミに頼みがあるんだ」

「……」

彼を知る万人が懇願し乞い願つたという声は、柔らかい響きこそあるが、何処か底冷えするほどに冷たい。何時如何なる時代でも統率者として在り続ける男のそれに、ソラスハは何も答えなかつた。

「——この世界は間もなく終わろうとしている。
だから、キミの手を借りたい」

“世界の終わり”などと普通の人間が口にしたとしたら、その時点ではソラスハは一笑して席を立っていたであろう。だがそれはしなかつた。ソラスハはただ目を細めて話

を聞くと、静かに口を開いた。

「……すべてのものには終わりがある。

来るべき終焉に抗い、仮初の世界を望むのか？

お前ともあろうものが」

「それは違う。これは招かざる終焉だ。終わり」

人類史は狂わされ、これまで積み上げられてきた歴史が消える。

それは『ボクたち』だけでなく、『キミたち』の消滅を意味するんだ」

「……」

「キミにとつても避けたいことの筈だよ」

「俺は別に、構わないがな」

「キミの大事なものも消えるかもしれない」

「ああ、そうだな。だがアレはそれを望んでいる」

柔いプラスチックに入った深い色の液体が揺れる。赤いストローを介して口に含むと、ソラスハは目を伏せた。例え歪んだ終わり方であつても、構わなかつた。この世界にそこまでの執着はなかつた。

起源と終焉は絶えず巡り、命あるものは死から逃れられない。それを良しとしない諦めの悪いものたちが、自らの運命と戦い、抗い、生に手を伸ばす。

そのものたちは勇者や英雄となり、その名は後の世に受け継がれていった。そうして彼らはある意味で、永遠の存在となつたのだ。

スカサハは彼らの光輝^{ゆうき}を特に好んだが、ソラスハが好んだのは歴史の裏に沈んだ“むめい”のものたちであつた。決して表舞台に立つことを許されない身でありつつも、抗おうとする彼らの暗影^{ゆうき}を、一等好んだのだ。

だから、だろう。ソラスハの脳裏に1人の青年の姿が過つたのは。

その意味に自分を嗤いながらも、先ほどロマニがしたように深い溜息を吐く。

「ああ、俺も甘くなつたものだ。アレのことは言えないな」

ぼやくよう言いながらも、その口元には柔らかな笑みが浮かんでいた。

それを見て桃色髪の男は目を瞬かせる。彼とソラスハの付き合いは果てしなく長いが、これまで彼がそのように笑う姿を見たことはなかつたのである。

ロマニの頭にも“どあること”が浮かんだ。

目の前の男が『弟子』なるものを取つた、というまさに天変地異の知らせを聞いた時の衝撃を思い出したのである。

始めに聞いたときは、己の耳が耄碌したのかはたまた光の王が耄碌したのかと、目も頭も白黒したものだ。またこうも思つた。あまりに暇過ぎて偶々見つけた人間を『修行』と称して痛めつけているのではないかと。

結果的に半分正解で半分不正解であるのだが、ソラスハにとつては不名誉な誤解が解けたのは、またまた天変地異かと紛う、光の王が『己の『蒼き弓矢』』を授けたことを耳にした時である。これはもう認めるしかなかつた。かのスカサハが弟子の1人に己が『朱槍』を授けたように、ソラスハもまた『蒼弓』を弟子に渡したという事実を。

「それで俺はどうすれば良いんだ、ロマニ?」

ロマニには、どうしてもソラスハを“どある計画”へと引き入れなければならぬ理由があつた。それはずつと前からロマニの頭の中にあつた計画である。

だからこそ、慎重にソラスハに声を掛ける必要があつたし、ただでさえ舌が良く回る男なので、その説得は難航するかと思ひきや、すんなりと頷いた挙句なんと協力的な言葉さえ寄こしたのだ。ロマニは叫びたくなるのをぐつと堪える代わりに、頭を抱えた。

どうやら親愛なる友人は、想像以上に弟子を可愛がつてゐるらしい。ありとあらゆる衝撃に撃沈したロマニは、素知らぬ顔で優雅にティーアを口にするソラスハを睨みつつ、『頼み事』を口に始める。

「カルデア、か」

「ああ、ボクはその医療部門のトップつてわけさ。これでもエラいんだぞ」

「ほう? 肩書と仕事量とどちらが重いんだ?」

「ぐう……。本当にキミは昔から性格が悪いね……!」

「失礼な。俺はただ疑問を口にしただけじゃあないか」

人理の崩壊を防ぐために設置されたと、いう“人理継続保障機関カルデア”。人類の英知が集結し形となつたその場所では、大規模な計画が推し進められようとしていた。数日後には試験的な稼働が行われるらしく、世界中の著名な魔術師の子孫が集められているらしい。来る“人類史の消滅”に抗い、その原因とも呼べる特異点事象を発見し、介入及び破壊を行うことで、人類を守る。成し遂げることができれば、後の世に名を残す英雄にだつてなれるだろう。その名誉を求める魔術師たちは、我こそはと名を上げたらしい。

一通りの説明をした後ロマニは、その穏やかな顔を引き締めてソラスハをじっと見ると、静かに告げる。

「ソラスハ。君には、この魔術師たちに交じつて実験を受けてもらいたい」

「……まあ、いいだろう」

「……だ、だからなん……そんなんに素直なんだい！」

ボクとしては調子が狂つてすつゞくやりにくいんだけど!!」

「ははっ。そう吠えるな。俺とて退屈は感じていたんだ」

興味のない物事には、途端に物臭になり腰が重くなるこの男をどう説得するかを、膨大に降り注ぐ仕事を消化しつつもロマニはずつと想えていたのだ。だから、こうもあつ

さりと乗り気になられてしまうと、悩んでいたことが時間の無駄だつたと感じてしま
う。

すっかり振り回されている自分に頭痛を感じて机に突つ伏したロマニの嘆きに、蒼と
も緑ともとれるその髪を払うと腕を組んだソラスハは、ふと笑つた。

「条件がある」

「……！ それでこそ光の王だ!!

良いだろう言つてみてくれ！ どんな無理難題でも今なら喜んで聞けそうだよ！」

「……？ 何故そんなに張り切る必要があるかはわからんが。簡単なことだ。

俺がカルデアに協力をサーヴ'アントするということは、戦場に出るということだろう？」

「ああ。だが戦うのは英靈だ。

キミが戦わずとも良い。マスターの役目は王と同等なんだからね」

「それじやあ態々俺が出る意味がないな。それに退屈過ぎる」

「え」

「俺は俺のまま、だ。

マスターとやらをやるのは構わんが、後方支援に徹する気はない」

「……キミとあらうものが前線に立つ氣かい？」

弓兵アーチャーはその後方支援が仕事なんだけどな」

「ふん。戦士とは前衛も後衛も成してこそそのものだ。

弓兵は戦士ではないとでも？」

「ああ忘れてた。理性的に見えるけど、キミも立派な戦闘民族せんとうみんぞくだつたね……」

「何を言う。智と武を兼ね備え、本能と理性を——」

「わかつた!! よおーくキミの話はわかつたよ！」

穏やかな気性で、和を好み、安寧を愛するとされるのが光の国の民であり王だと、皆は口を揃えて言う。しかし、その裏側を知るロマニは、それを耳にする度に意義を唱えるのだ。確かに気性は穏やかではある。そう平常時は。穏やかというのは、スイッチが入らなければの話で、一度スイッチが入ると誰にも止められない地雷のような男なのだ。

武勇を好み、戦いを好み、無謀な愚者を愛する苛烈な男。そんな男を引き入れようとした時点で、こうなることは予想が付いていた。

「采配はキミに任せよ。だけど、キミの存在はある意味最終兵器だ。

出来ることなら隠しておきたい」

「ふふ、お前こそ随分物分かりが良いじゃないか。

案ずるな俺も目立ちたいわけではない」

「そりやね、何年の付き合いだと思っているんだい。

キミがそういうことは想定内さ。ただ1つだけ守つて欲しいことがある」

「ほう？」

「任務中は、『コレ』を付けて欲しい」

「……ローブ？」

「これはキミが垂れ流している魔力を遮断するものだ。

急いで作つたからすつゞく扱い難い性能だけど、キミなら大丈夫だろう。

流石にそのまま来られては、一目で大騒ぎになるからね」

「ふむ。お前は俺に人間に交じれと？」

「ああ、そうだ。

——やつてくれるかい？」

「お前は俺に何をさせたいのか……。おつと、今答えは必要ないよ。

この先も長い付き合いになるんだろうから。じっくり確かめさせてもらうさ」

「ふうん。ボクと知恵比べつてワケかい」

「……ふふ、俺を良いように使えるんだ。安いものだろう」

「実にキミらしい考え方だね。望むところだよ」

ロマニがソラスハに差し出したのは、一枚のローブであつた。

明らかに上質な生地には『封印』の魔術を応用した術が込められており、身に着けて

いる間はソラスハの持つ“魔力”と“一切の特殊性”を封じ込めることができるとロマニは言う。

といつても全く魔力がなければ怪しまれるので、人並みの魔力は放出できるようにしてあるらしい。相変わらず器用な男だと、ソラスハはローブを見て思った。

愉快だと言わんばかりに目を細めた男に、ロマニもまた笑みを浮かべる。

こうして二人の男の密談は、“終始穏やかに”終了したのであつた。

光の屈折

その日は、まさに命運を決するであつた。

神の目すら欺かんとするように、高く聳え立つ山の一部に建てられた“人理継続保障機関カルデア”。薄い空気を吸い上げたソラスハは、見上げた風貌にかつて見たバベルの塔を重ね合わせた。

そんなソラスハの横を、まだあどけなさを残した少年少女たちが通り過ぎていく。この巨大な施設に集められた少年少女たちの顔は、興奮と誇りに赤く染まつており、意気揚々といった様子で続々と中へと入っていく。

世界中からの注目を集めかるカルデアの記念すべき初稼働の日に選ばれたことが、彼らにとつてどんなに名誉であるか。それを彼が計り知ることはできないであろう。

ロマニからの頼み通り彼らに交じるような姿をしたソラスハは、“本体”よりも背格好を大分縮めており、毛足の長いローブを目深に被り、口元には黒いマスクを着けていた。なんとも怪しげな風体だが、古い習慣の残る魔術師の世界では奇抜には映らないらしい。一部の所謂“近代派”からは怪しむような視線を向けられたが、気にも留めずソラスハは会場内へと進んでいった。

説明会場に案内されると、室内は年頃の男女が集まつただけあつて賑やかであつた。顔見知りらしい少年少女が塊になつて話す姿を横目に、指定された席へと付いた。そうして彼らの話し声を聞き流しつつ周囲の様子を伺う。

魔術師の末裔やらエリートやらが集められているという情報はロマニから聞いていたが、確かに人間の子供にしては強い魔力を持つものが多くいた。

「なあ、」

「ん？」

そうやつて周囲を観察していると、ソラスハよりも少し遅れて来た子供が隣の席に座る。

子供は彼をじいと見たかと思うと声を掛けて来たのだ。まさか声を掛けられるとは思つていなかつたソラスハもまた、子供に視線を移すとほうと息を吐いた。

——色素の薄い柔らかそうな髪は、光に透かすと金色にも銀色にも見える白金色をしていて、室内灯の光を反射しキラキラと輝いていた。ソラスハを見るローズピンクの瞳は、在りし日に見た“彼女”の色と似ていた。

その子供はまるで“光を纏う”が如く、そこにいた。

中性的な容姿と声音であつたために判断が遅れたが、少年であるらしいとソラスハは氣付く。

「お前、なんでそんなもん被つてんだよ」

「あー。まあ、ちょっと」

「なんだよ。気になるじゃねえか」

これ程までに容姿と口調が一致しないのも珍しい、とソラスハは思わず笑みを溢す。微笑しつつ言葉を濁らせたソラスハに頬を膨らませた少年は、さらに彼へと詰め寄つた。

此処に集うのは家柄の良い子どもばかりで、言動もそれを匂わせるものが多い。しかしこの少年は奔放に育てられたらしく随分とお口が悪いようだ。まるで妹が“可愛がつていた”もののようだと、ソラスハは心の中で呟くと口元を緩める。

すると、少年は目を見開いた。ソラスハへと詰め寄つた少年は、彼がすっぽりと被つているローブの隙間から、ちらりとその瞳を見たのだ。

マスクをしているため、顔の造形こそ不明瞭であるもののその“青緑の瞳”は澄みきつた湖面の如くうつくしい色を散りばめている。

ソラスハの纏うローブにより“神秘性”は封じられているが、そのうつくしさは健在であつた。無機物でも有機物でも、男性でも女性でも、うつくしいものに目を惹かれるのは神でも人でも変わらぬことである。故に少年は、ソラスハの性別関係なしにその瞳に惹き込まれたのだ。

「な、なあ！お前、チームは？」

「チーム？……そういえば何か言つていたな。

……Aチームだつたか？」

「マジかよ！オレもAチームだ！」

同じチームなら名前知つとかねえとだよな。

オレは……」

「——静肅に！！

これより大いなる任務を開始する！！』

いつの間にか説明開始時刻を迎えていたらしい。

集合時間ぴったりに流れたアナウンスと同時に、ぞろぞろと大人たちが入ってきたかと思うと、その中の1人が号令を掛ける。あまりのタイミングの悪さに、少年の顔にぱつと咲いた笑みはあつという間に萎んでしまった。

そうして開始された説明は、ソラスハにとつては退屈極まりない内容であつた。所長だと名乗る年若い女性が出て来ると会場内はどよめき立つたが、その意味をソラスハは知らない。頬杖を付きながらあるが大人しく聞いていた彼は、ちらちらと横から感じ

る熱い視線に気付かないフリをした。

本日行われるスケジュールの冒頭部分である説明会は、大した問題はなく終わったようだ。問題があつたとすれば、ぎりぎりに入ってきた少年が居眠りをしたかどうかで部屋から出されていったことか。別に大それた話ではないし、年若い少年なのだから居眠りぐらいたんだろうと、目くじらを立てる女所長に溜息を吐いたソラスハは、彼の弟子が過酷な修行の中で居眠りをした際に容赦なく断崖絶壁から蹴り落した張本人である。

説明が終わると、どうやらこの中でも優秀な人間たちがAチームとして先発するらしく集合を掛けられる。専用の部屋へと移動すると、いよいよレイシフトが始まるようだ。

レイシフトは、ざっくりというと肉体を疑似靈子に分解することで、データ化し時間座標まで送り込むという超未来的なシステムである。適正者でも相応なリスクは生じるが、適正でない者に使用すると分解されたまま戻れないか、ありとあらゆる部位が歪に混ざり合い、『人ではない形』で戻されるらしい。

人間の技術の発展の裏には倫理なき犠牲がつきものであるが、いくら適正者とはいえ嬉々としてそのリスクを背負おうとする子供たちをソラスハはただ見ていた。

「へえー！これがコフインってヤツか！」

やつとオレも戦いに出れんのかあ……すげえワクワクする！」

「……。マスターは後方支援^(サボータ)のようなものだろう？」

「つまんねえこというなよ！」

せつかく歴史上の英雄豪傑たちと戦えるチャンスなんだぜ？ 血沸き肉躍るつてヤツだろ」

「ほう？ お前は戦いを恐れんのか」

「あははっ！ 変わってるつて思うだろ？」

オレの家は結構複雑でさ。オレはどつちかつつーと魔術よりも武芸の方を鍛えられたんだ。だから小難しいこと考えるよりも、武器振り回してた方が性に合うんだよな……」

あつけらかんと笑うその快活な少年に、ソラスハもまた笑みを浮かべる。煌々と輝く少年のローズピンクの瞳は、その可憐な色に似つかず獰猛な光が見え隠れしていた。

好戦的で怖いもの知らずのこの少年は、きっと妹が好むタイプの人間なのだろう。 “とある幼子”と本当に重なる少年だと、ソラスハは息を吐いた。

「おつと！ そうだ、まだ自己紹介の途中だつたじやねえか！」

オレはレイつてんだ。なあ、お前の名前教えてくれよ！」

「……ソラスハだ」

表情豊かな少年は、ころりと表情を変えると人懐こく笑いながら名乗りを上げる。何がそんなに気に入られたのか、と首を傾げながらもソラスハがそれに答えると、レイと名乗った少年は嬉しそうに何度も彼の名を口にした。

「一筋の光とは似合いの名前だな」

名は体を表すといつたところか。言葉を呪へと変える魔術師の家系に生まれ、そう名付けられたのならば効果もひとしおであろう。ぽつりとソラスハが呟けば、彼は頬を赤らめて破顔する。その年齢相応の姿にソラスハもまた目を細めた。

レイシフト準備が整うまでの僅か数分。あと少しで死地へと向かう彼らの穏やかな姿は、周囲とは一線を画していた。熱に浮かされた周囲の子供たちには、それが異様に思えたのかもしれない。ふと荒い足音が聞こえたかと思うと、3人少年たちが2人の間を割るように立ちはだかつた。じろじろとソラスハとレイの顔を交互に見ると、1人の少年がソラスハの方を見て口を開く。

「あア？ なんかうるせえと思つてきたら随分程度の低いのが混ざつてんじゃねえか。

それっぽつちの魔力で俺と同じチームかよ！ 一体どんな裏の手を使いやがつた？」

「さあな。判断したのはこのカルデアだ。

「俺に文句をつけられても困る」

「生意氣言うじゃないか。」

Aチームに選ばれるのは、魔術師の中でも最高峰の“血筋”を持つか、それに匹敵する魔力をもつかだ。……見たところ大した家柄には見えないが?」

開口一番に怒鳴り散らした少年にソラスハは、面倒臭いと言わんばかりに溜息を吐くと同時に、やはり来たかと小さく呟いた。

眼光鋭く睨み付けてくる3人の少年に憶えがあつたのだ。彼らは、ソラスハが説明会場に足を踏み入れた時からずっとその視線を送っていた。それに気付いてはいたが、睨むだけで何のアクションもしてこないので放置をしていた、というわけである。

そうやつて受け流し続けるソラスハに、任務開始時刻ぎりぎりになつてついに痺れを切らしたらしい。

「そろそろレイシフトが始まる。あまりバイタルを乱すと支障が出るぞ」

「ツチ。誰に向かつて言つてんだ。

そんな大層なカツコしやがつて。大魔術師にでもなつたつもりか?あ?」

3人の中で1番体格の良い少年は、そう吐き捨てるにソラスハのローブ目掛けて手を伸ばした。その荒々しい手付きは剥ぎ取つてやろうという氣概の表れだろうが、生憎それを許すほど甘くはない。ソラスハのフードに隠れた瞳が、ふと鋭く輝いた――。

「——やめろっ!!」

「つ?! いつてえ!」

ソラスハを守るように薄いベールが現れたかと思うと、ぱん!と高い音が部屋に響く。彼の横で魔力が高ぶるのを感じたので、レイが守りの魔術が発動させたのだということはすぐにわかつた。大柄の少年は、痛みに顔を歪めると弾かれた手を握り締めソラスハの前に躍り出たものを睨み付ける。

「き、……きさま……」

「こいつに喧嘩売るなら、オレが相手になつてやる!」

今にも噛み付かんばかりに怒鳴り声を上げたレイは、ぐと腰を低く落とした——。

「……はあ。落ち着け、レイ

「うわっ!! ソラスハ……!?

な、何するんだよ!」

ぐと床を踏みしめようとしたレイは、後ろから伸びて来た手によつて動きを封じられる。驚いて振り返えると、服の襟足部分を掴んだ手の主に向かつて声を上げるが、返つ

て来たのは深い溜息であつた。

「お前まで熱くなつてどうする」

「だつてこいつら、お前のこと……」

「そろそろ任務開始時間だろう。

続きは向こうで充分にできるだろう」

「……。確かに、そーだけどよ」

「勇猛も良い、暴勇も良い、だが猛進はいけない。

戦場では先走るものほど先に散るものだ」

諭すような宥めるようなソラスハの言葉は、レイの中で不思議なほどにすとんと落ちていつた。冷静さを取り戻した2つのローズピンクを見て、ソラスハは1つ頷く。
「さて。取るに至らぬ戯言だが、売られた喧嘩をそのままにしておくほど俺も優しくはない」

「はっ！　てめえなんかに何が出来ん、

—————つ、あ、、……な、アあああ、……つ！？」

「ははっ。まあ安心してくれ、死ぬことはないさ。

……ちよつとばかり躊躇が必要だと思つてね。

これからは不用意に悪態を吐くことはおすすめしないよ。

でないと、死なない程度の痛みにのた打ち回ることになるだろう」とん、とソラスハの指が胸を突いた。

——それだけ、であつた。

誰の目にもソラスハの動きが映ることはなく、誰の目にもソラスハの術を解することはない。

気が付けば、大柄の少年は胸を押さえ芋虫の如く床にへばり付いていた。しんと静まり返った部屋に、少年の呻き声だけが響く。

「——おい!! 何をしている!

レイシフト開始時刻であるぞ! すぐにコフインの前へ整列しろ!」

硬直した空気を裂いたのは、カルデア組織の人間の声であつた。

子供たちははつと我に返るとそれぞれ割り当てられたコフインの前に立つ。ソラスハは何食わぬ顔でレイの手を引くと、自らも同じようにコフインの前に立つた。

背後では体を起こした少年が何かを喚いていたが、組織の人間からの鶴の一声によつて収まつたようである。恨みがましい視線を投げながら、渋々自分の定位位置に向かつていった。

「よし、準備は整つたようだな。

ではこれより最終確認を行う。良く聞くように」

先ほどまでの空気は雲散霧消し、張り詰めた緊張感に変わる。

組織の人間は顔を強張らせる少年少女たちに、最終的な確認と心構え、そして激励の言葉を告げた。そうして一人一人の顔を見た後に手を上げて合図を送ると、プシュウと音を立てて機械が作動し、コフインがその口を開いた。

熱波

周囲の“音”が消失し、凄まじい衝撃が駆け抜けた――

聴覚を奪われ、悲鳴など上げる間はなかつた。

感じたことのない、想像したことのない“熱”が彼らの意識を溶かし、その肉体へと

襲い掛かつたのだ。多くのものは何が起きたかわからなかつたであろう。いや、わからなくて良かつたのかもしない。

一瞬にして弾け飛び叩き付けられた体に、崩れ落ちる壁を見た。

一瞬にして炎に包まれ黒ずみとなる体が、床に倒れるのを見た。
即死であればまだ楽であつただろうに、残酷なことに崩れた壁に足を挟まれ生きたまま焼かれ者も、哀れなことに目の前で友が死んでいくのを見てことしかできない者もいたのだから。

白い空間は赤に染まり、悲鳴すら亡くした子たちが次々と炎に飲まれていつた。
無慈悲なる炎はそれでも止まらない。

爆発の連鎖は、飢えた獣の如く幾つもの命を喰らい猛火を上げる。

そんな瞬き一つの間に地獄と化した部屋に、ひとつ起き上がる影があつた。

「防げた、…………のか？
つ……つ誰だ！」

端々の焼け焦げたロープを纏う影、そうソラスハである。

人間に“同化”した体では突然過ぎる爆発に反応しきれず、炎に飲まれたと思つていたのだが、咄嗟に発動した守りの術が功を奏したようだ。

“すつごく扱い難い性能”とロマニは言つていたが、予想以上に扱い難く制限が掛つていることを実感する。

瞬く間に吹き飛び、崩れた壁や装置に覆われた部屋をぐるりと見渡すと、何かの気配を感じソラスハは声を上げた。燃る炎により揺らぐ姿。しかしソラスハの目ははつきりとそれを捉えた。それは“白衣を着た女”であつた。女はソラスハの方を見ると驚愕の表情を浮かべたが、それはすぐに蔑むような嘲笑に変わつた。

アレがこの爆発の原因か。とソラスハは女を睨みつける。だが、女はソラスハには目をくれず、“どある方”を見ると満足げに笑い、その場を去つて行つたのだ。

「……逃げたか。まあ良い」

今は構つている暇はないだろうと、ソラスハは改めて周りを見る。

炎に焼かれるもの、衝撃により壁に叩き付けられ潰されたもの、瓦礫に圧し潰されたもの。至る所に血痕が、血だまりが広がり、地獄のような光景を描き出していた。

ソラスハは瓦礫の破片を払うと一步前へ歩き出す。が、ある違和感に動きを止めた。その方を見ると、身に纏うロープのその端を掴む、何かがあつた。

——人の、手。それもまだ柔い、手。

白い肌のそれを見て、ソラスハの目は見開かれた。

数多くの戦場に出た彼には四散した体など見慣れていたし、如何なる死であろうとも平然と飲み込むことは容易い。だが、それを見た時、確かにソラスハは“動搖”した。そして、その先にあるうつ伏せに倒れた“もの”に、ひゅつと喉が鳴るのを遠くで聞いた。

——輝く丸い瞳で、己を見上げていたのは誰であつたか
——暗く鋭い瞳で、己を掴んで止めたのは誰であつたか

その姿に様々な“姿”が重なり合いソラスハは、遠退きかけた意識を唇を噛み締めるここで引き戻すと、大きく息を吸い込んだ。そうしてその指先を伏せている“それ”へと伸ばす。触れた肩はまだあたたかく、引き寄せた体は惨たらしい傷は見当たらなかつた。

ソラスハは顔を伏せる。確かに慘たらしい傷はない。“他”と比べて欠損は見当たらず、臓器も露出していない。……その胸に、“大きな穴”が開いていなければ、一縷の望みはあつたのかもしれない。体を引き寄せて自らの膝の上に乗せる。

造作の綺麗な顔に、白金の髪、絹のような白い肌は、こうして口を閉ざしてしまふと、眠り姫を連想させる。だがローズ・ピンクの瞳はもう光を宿さず、口調は破天荒ながらも強い声を聞くことはないのだ。

いくらソラスハとはいえ死者への手出しは禁忌タブーだ。

方法を知らないわけではない。だが、それをすることはこの子供への冒瀆となるだろう。

ソラスハを“命を懸けて守つた”この少年の――。

ソラスハはその胸に空いた穴に触れる。

人体の生を司る心臓は、床一面を染め上げるほどの血を放出し潰れていた。

「……魔力の、残り香」

労わるように、その指先を少年のまだ薄い胸に空いた穴を撫でていると、不意に“違和感”に触れた。それは少年の体に残る、紛れもない“少年のものではない魔力”的残滓であった。

びたりと止まつたソラスハの指が、微かに震える。

「……不審な気配はしなかつた。

ロマニは何も言つていなかつた。

裏切者がいたのか。それとも内通者か――。

だが何故レイだけを狙つた？

俺の存在は漏れてはいないとするならば、レイを確実に殺さねばならなかつた理由がある筈だ。

いずれにしろ……」

他の子供たちは全員爆発に飲まれて、死んだ。

周囲に散らばる亡骸に目を向けるも何の痕跡も残つてはいなかつたし、まだソラスハの耳にはか細い悲鳴が聞こえていた。そう、全員止めを刺されたわけではなかつたのだ。たとえ時間の問題だとしても、何故かレイだけが直接的に手を下されていた。

今わかるのはそれだけだ。しかしそれだけで充分であつた。

“レイは、あの爆発で死んだのではない”

少年の残した真実に、ソラスハは――。

「……すまない、レイ」

これが少年の運命であつた、とそう飲み込んでしまうのは容易いことで、もう何度も繰り返してきた行為だ。ソラスハはそつと少年の頬を撫でる。

ふつり、とした熱が、体の中から競り上がつて来るのを感じた。

ふつりふつりと、混み上がるそれの“名前”を、ソラスハは知つていた。

「俺は……お前の、死を踏み躡ろう」

端々が燃え落ちた“約束の証”^{ローブ}に手を掛けたソラスハは、それを脱ぎ払つた。そして赤に染まり果てたその場所で、“白金の光”は純白の輝きを広げたのだ。

コフイン内マスターのバイタル
基準値に達していません

——レイシフト 定員に 達していません。
該当マスターを検索中……発見しました。

——適応番号01 レイ・
適応番号48 リツカ・フジマルを
と

マスターとして 再設定 します。

——アンサンモンプログラム スタート。
靈子変換を開始します……。

死と生と

それは遙か古の時代のことだ。

その頃はまだ太陽と月が共に空に浮かんでおり、昼夜の区別もなく、ただ物言わぬ生命たちがやつと芽吹きを迎えていた。2人の兄妹が降り立つた地はそんな静寂に満ちたところであつた。

顔立ちの良く似た彼らはまだ幼く、目の前に広がる漠然たる平野をきよろりと見回すと、どちらかともなく顔を見合わせる。青にも緑にも見える髪色を持つ少年は、赤にも紫にも見える髪色を持つ少女に微笑みかけると小さな手を引いて走り出した。

少女は戸惑つたように眉を下げたが、少年の手をぎゅっと握り締めるとその背を追うようにはひたすら足を動かす。

何処までも続く大地を、頬を撫でる風を感じながら、2人は駆け抜けていく。

いつしか少女の顔にも笑みが浮かび、2人は笑いながら緑芽吹く大地を踏み締めていった――。

ぶつりと何かが切れた音が聞こえ、赤紫の瞳は見開かれた。

影に満ちた寒々しい世界にひとり君臨する女王は、取り乱したように息を震わせる。

「これは……つ、どういうことだ……？」

許されていた唯一の繋がりが、ふと揺らいだ。

その糸は決して目に見えないが、冷たい世界で生き続けるスカサハにとつて掛け替えのない己の宝具ともいえる大切なものだ。

彼女は持ち得る速さで、いつも兄と会話を交わすあの池へと向かう。兄の住まう天と、妹の住まう地を結ぶ唯一の場所へと。

その池に張られた水は影の世界にありつつも清らかで澄んだ水を湛えているのだが、駆け付けたスカサハが目にしたのは、黒く濁り淀んだ汚濁の池であつたのだ。

「あ、ああ……」

それが意味することを、彼女がわからない筈がなかつた。

スカサハとてその“異変”は感じていた。影の国に迫る“終焉”に最期まで抗い続けようど、己が槍を振るい続けていた最中であつたから。それでも、あの兄の治める国が簡単に“墮ちる”わけがないと信じていた。死を許されぬ片割れが、自分を置いていくわけがないという自負があつた。だからこそ濁り切つた池が示すものに、スカサハの気高き膝は呆氣なく折れたのだ。

「そん、な……。兄、よ。……わたしを、置いていつたというのか……！」

潰えるときは共に、と互いの剣槍けんごを交わしたあの誓いゲッショウは、……偽りであつたと!!」
予測されていた“人理の崩壊”は、予想以上に早く訪れた。

人類史の滅亡は人類だけではなく、神々にまで影響を及ぼさんとしている。

その証拠に影の国の門は今にも破られようとしていた。だが、それよりも早く、光の國の門は破られ、侵略者共に踏み躡られたというのか。スカサハはいつもの冷静さをかなぐり捨てて慟哭をあげる。

「……ソラスハ、……あに、さま」

光は影を抱き、影は光と共に在る。

影の消失は光の孤独を意味し、光の消失は影の滅失を意味した。

暗い色をした地に広がるスカサハの髪がぬらりと揺れる。

顔を上げたスカサハは幽鬼を想わせる動きで立ち上がると、緩慢に天を仰いだ。

瞼締められていた唇が徐々に解けていき、ふと微かな笑みが宿る。

「光亡き今、どうして影が在り続けられようか」

手にした朱槍をくるりと回したスカサハの赤い唇には、淡い笑みが刻まれていた。その可憐な少女を思わせる表情は、女王の名に相応しい堂々たる立ち姿とも、暗い影の落ちた世界とも似合わず……。いやこれ以上ないほどに似合いであろう。非の一点の打

ちようもないスカサハの顔は、ぞくりと背筋を震えさせる狂気を孕み影の中を浮きあがる。

「ふ、ふふふ……」

生まれてこの方光の中にいた貴方には、冥府の闇はさぞ冷たかろうな。
安心してくれ兄上。貴方をひとりにはさせないさ。

私はこの名を懸けて、誓いを果たそう

幾千、幾万の心臓を穿つたその朱槍が、最後に貫くもの。

槍先を心臓へと突き付けたスカサハは、今にも歌いださんばかりの表情で、濁り切った水面を覗き込む。そこには、歪な笑みを浮かべた彼女の顔が映っていた。

「待つていろ、ソラスハ我が兄よ

今、このスカサハが……お前の傍へ参る」

憎愛という矛盾はいつしか過激な執着へと変貌を遂げていた。神代を生きるものにとつて、血の繋がりがあるうが、既婚者だろうが、関係はない。自分の気に入つたものに執着をし、子を成させる。神話にも当然のことのように記された感情を、スカサハもまた当然のことのように抱えていた。しかし、彼女には影の国という誇りしがらみがあつた。そして幸いなことに、ソラスハとは自由に連絡が許されていたので、抑止力になつていたのである。それが、今、崩壊を迎えていた。

「…………憎きわたしの光^{いとしき}」

ふふつ、ふふふふ…………あはははははっ!!」

氣高き武人であり、誇り高き女王が唯一 „素“ を見せるのがソラスハであつた。ある意味では、彼女の逆鱗ともいえる存在である。それが、今、破壊された。

影の国の女王スカサハは、影の国の消滅と共に „解き放たれた“ のである。

余談であるが、彼女の書物を解読した近代の人間はこう表現した。

——影の国の女王スカサハは、最古のブラコンにしてヤンデレであつたと。

「…………寒つ。…………ああ、雪か」

背筋を氷で撫でられたような、嫌な寒気に少年は体を震わせた。

細やかな雪がぱらぱらと降り注ぎ、石畳を白く染めている。

雪の „白“ に紛れそうで紛れない色を持つ彼は、体にぽつりぽつりと落ちる雪を払いつつ目の前に広がる建物をまじまじと見上げた。

それは酷く荒廃しているが、大きくて立派な東洋の „寺“ であつた。

聖地である筈の寺は暗澹たる様子で、足を踏み入れることすら憚られる禁足の地へと変貌していた。どうやら自分は招かざる客のようだと、少年は目を凝らす。

あの炎上するカルデアから、知らないうちに知らない場所へと飛ばされていたらし
い。動じることなく少年は視線を左右させて周囲を伺つた。

「なにか、いるな」

意識を取り戻してからというもののはずつと感じていた、『見てる』気配の主が此処
にいると少年は確信した。炎に呑まれていった同胞たちが彼に投げたそれとは、全く違
う視線から相当な手練れがこの先に待ち受けることを知る。

とある方向へと視点を定めたと同時に、ブンと空気が震えたかと思うと何かが少年の
頬を掠めた。つうと頬を生温かいものが流れ落ちるが、構わず目を滑らせて後ろを見る
とそこには『矢』が刺さっていた。

「……ほう？ 避けたか。

子供が迷い込んだのかと思ったが、どうやら違つたらしい」

「……！」

「ふむ。上等な魔力を持つてゐるじゃないか。

ということは……貴様は魔術師マスターか。

だが何故この場所がわかつた？

黒い空から降る白色の中に、『それ』はいた。

屋根の上に立ち少年を見下げる『それ』——赤を脱ぎ去つた体に、鱗割れた片目は

黒に潰されており、退廃的な雰囲気を漂わせ立つ青年――の手に握られているものに、ローズレッドは見開かれ、そして鋭く細められた。

「……お前が、サーヴァントか」

「サーヴァントを見るのははじめてかね？」

それは悪いことをしたな。始めて目にするサーヴァントが『真つ当なものではない

』とは、君も運が悪い』

少年の反応を見たそのサーヴァントは、自身を見上げて呟かれた言葉が『初めて目にするサーヴァントに対するもの』だと思った。だから自傷の意味を込めて返した笑みが、言葉が、多大なる地雷を踏み抜くことになるとは知らなかつたのである。

「……サーヴァントだろうが何だろうが関係はないな」

「ふつ、自信があるのは結構。だが、過剰な自信は身を滅ぼすだけさ」

「ふふ、……お前がそれを言うのか」

「なに……？」

兵器ともいえるサーヴァントに人間が勝つことはまず有り得ないので、人間は自分のサーヴァントを召喚して戦う。それが聖杯戦争だ。魔術師なら誰でも知つてゐる常識であるにも関わらず、少しも怖じた様子のない少年に彼は眉をひそめた。サーヴァントは弓兵の『特殊な目』を以て少年を見通すも、彼と縁を繋いでいる存在は見えない。

この寺の境内は、今、1人のサーヴァントの領域となつていた。だからもし、少年と契約を結んだ存在が潜んでいても感知することは容易い。となれば、もしやこの子供は1人でサーヴァントに挑もうというのか。なんと愚直で愚策なのだろうとサーヴァントは口元に嘲笑を浮かべる。

少年はただ静かにサーヴァントを見上げた。

そのローズピンクの瞳が不意に、ぎらりと輝く――。

「　　」

少年の口から洩れた言葉をサーヴァントは聞き取ることはできなかつた。

——ぱちりと光が爆ぜる、と同時にサーヴァントの頬に“何か”が掠つた。

それは、サーヴァントの目であつても捉えきれぬ一筋の光やであつたのだ。

「……なつ!?」

「おつと、加減を間違えたか？」

すまないな。サーヴァントを相手するのははじめてなものでね。
ついうつかり、やり過ぎてしまふかも知れない」

「はっ、その心配には及ばんよ」

禍々しい空氣に汚染された境内に、2つの魔力が満ちていく。
闇の中でも尚光を放つ白金の髪を靡かせ、手にした“弓矢”を構える少年にサーヴァ
ントは暗く笑う。

「魔術を用いた武器の生成か。その技、どこで覚えた?」

「昔ちよつとな。何處かの愚か者の真似事で、大したものではない」
「……そうか。この弓兵おれに、矢を向ける勇気は賞賛しよう。

同時に思い知るが良い。無謀な勇気など……」

きりりと弦が軋む音、構えたのはどちらが先であつたか。

お互いが構え放つた矢は、2人の真ん中でぶつかり合い“消失”した。
少年は再び矢に手を掛けようとして、身を引いた。

間髪入れずに、少年の顔があつた位置を“刃”が貫いたのだ。

「……っ！」

「ほう？ 避けたか。

初見で避けられる人間は珍しい。

どうやら君の力を認めざるを得ないようだな」

サーヴァントは生身の肉体を持たないので、人間の肉体の限界を遥かに超越した力を引き出すことができる。力も、敏捷さも、基本的に人間が上回ることができない存在との、対峙に、少年は……笑つた——。

「仕 置き が 必 要 だ な」

開いた瞳孔、高まり続ける魔力……。

要するに少年は“ぶちぎれ”たのだ。

それが何に対する怒りであつたのかを、サーヴァントが、そして少年自身が知るのはもう少し先のことになる。

◇*◇*◇*◇*◇*◇

「――」というわけだ。カルデアにおけるレイシフト実験は失敗し、先発したAチ一ムは全滅したかのように思えたけど、まさかあのマスター候補1番、レイ君が生き残つてくれていたとはね』

「ドクター、そのレイさんというのは」

「ああ。今回選ばれたマスター候補の中でも、ずば抜けた魔力の持ち主……なんだけど、どつちかというと魔術よりも武芸に才能を發揮してね。

『これまで用心棒として彼女の傍にいたんだ。……そうだね？ 所長』

「ええ。そうよ、レイ……。」

レイ・アニムスフイアは私の弟です。

ただ私とは違つて、マスターとしての才能はあつた』

『だから今回白羽の矢が立つたつてわけさ。

……君たちにしてもらいたいことは、3つ。

今いる特異点の攻略と、レイ・アニムスフイアの搜索。そして、他に生き残つているものがいなか確認してきてくれ』

「ほかの、生き残り……？」

「……。これは、あくまでも僕の勘だ。」

こちらの解析でも生存者の反応はない。でも……」

赤茶けた空の下で、生身から発せられる声が響いていた。

モニターを覗き込みながら作戦を練るは、3人の少女。生き残ったマスター候補の1人リツカ・フジマルと、彼女のサーヴアントとなつたマシユ・キリエライト、そしてカルデアの所長オルガマリー・アニムスフイアである。

真剣な表情で話し合う彼女たちの周囲は炎が燻つており、あらゆるもののが焼ける嫌な臭いが街全体に漂つていた。

マスター候補としてこの度の実験へと参加したリツカは、例によつてカルデアの“爆発事故”に巻き込まれ此処にいる。あの爆発に巻き込まれ無事であつた理由は、彼女が類稀なる幸運の持ち主である証であつたのかもしれない。特出すべきものがない“一般人”である彼女が、マスターとして検出され、デミ・サーヴアントとして覚醒したマシユとの契約に成功した。これだけでも実験の結果としては大成功といえようが、当のカルデアは崩され、あまりに大きな犠牲を払つた挙句、人類史崩壊という最悪の結末を迎えた今、最早これは実験などという軽いものではなくなつてしまつた。

この度のレイシフト実験における責任者の1人であるオルガマリー・アニムスフイアは、素人丸出しのリツカに呆れつつも、特別取り乱してはいなかつた。彼女の平常心はとある存在によつて保たれていたからである。それは彼女たちの会話の中でも上がつ

た彼女の弟——レイ・アニムスファイア。オルガマリーが最も信頼する人間であり、実験における最有力候補として名が上がっていた人物である。

「わかりました。では、レイ・アニムスファイアの捜索を最優先とし任務にあたりましょう」

「ああ、それが良いと思うよ。

対サーヴァントにおいて君たちの戦力となるのはマシユ、君だけだ。

如何せん今ままではこの特異点を切り抜けるのは不可能に近いだろう

淡々とそう言つたオルガマリーは1つ頷くと冷静に判断を下す。

モニターに映る桃色髪の男は視線を揺れ動かしながら、歯切れ悪く言葉を返した。

あからさまに動搖を隠しきれていないその男——ロマニはそれほどまでに焦燥に駆られていた。

「あ、あの……ドクター?」

董色の髪の少女マシユは心配げにモニターを覗き込んだ。ロマニの様子を、この緊急状態に実質トップとして対処しているが故の異常だと判断したためである。

「いや、なんでもない——。

そんなことよりも、敵の反応だ。しかも複数……!」

「えつ！ マシユ！」

「はい、センパイ！」

そんなマシユにロマニは淡く微笑んだが、すぐにそれを崩した。

モニターには複数の生体反応が示されており、彼女たちを囲むようにして続々と出現したのだ。リツカは己のサーヴアントに声を上げると、マシユもそれに応える。動きはどんなにたどたどしくも、二人はこの短期間でマスターとそのサーヴアントとして信頼をし合っていた。守りに特化した宝具が構えられ、リツカとオルガマリーは一歩後ろへと下がった。

いつの間にかロマニとの通信は切斷されており、これ以上のサポートは望めないようだ。

黒く塗り潰されたサーヴアントは声にならぬ声を上げて、リツカたちを囲う。

それがどういう存在であるのか。魔術の知識も戦う術も知らないリツカには到底想像ができなかつた。しかし、それらが今自分たちを亡きものにしようとしているのだけは、明確なことなのだ。ならば抗わなければならぬ。せめて、もう1人のマスター候補を見つけるまではリツカが要となり戦い続けなければならないのである。

「……仕方ないわねっ！ ほんつとズブなド素人なんだからっ！」

ロマニとの通信では威厳のある所長として振る舞うオルガマリーだが、素は中々のじやじや馬というか『口の悪い少女』そのものであつた。リツカとマシユの戦う姿に

痺れを切らしたらしい彼女は、後ろから襲い掛かつて来た敵目掛けて魔術をぶち込んだ。

マスターの適正は持たないが、魔力も魔術回路も一級品以上であるオルガマリーの放つた攻撃魔術は、少しばかりではあるが敵の動きを止める。その隙を突いてマシユが武器を振るい、敵を打ち碎くが、次々と姿を現す敵を1体1体丁寧に倒しても意味はない。

消耗戦は明らかにリツカたちが不利である。

しかし大勢の敵を一掃できる術を彼女たちは持ち得ていないのだ。

「おっと、こりや俺の出番だな」

万事休すかと思われた彼女たちに、1つの光が差したのはその時であつた。

影の使徒

「はああ……」

観察者は椅子に凭れると、白亜の天井を見上げる。

「……」
観察者は椅子に凭れると、白亜の天井を見上げる。
ずっと動かし続けてきた体が酷く重いが、不思議なくらいその頭は冴え渡っていた。
それが一種の興奮状態であり、後で反動が来ることはわかつていたが、彼には止まることは許されていない。カルデアを担う1人としてこの緊急事態に立ち向かい続けなければならなかつた。责任感というよりも、罪悪感がロマニに重い影を落としていた。

焼け野原と化したカルデアに他の職員やサーヴァントの力を借りて応急処置を行い、何とか重要中の最重要な機能を優先して回復させることができた。しかし先にも述べたように、レイシフト適正を持つ有能な人材はごく一部を除いて全滅し、カルデアの頭脳であつた職員たちも殆どが命を落とした。これにより、レイシフト適正者全員で担当であつた任務すべてが、あろうことか『一般人』である藤丸リツカとレイ・アニムスファイアいうたつた2人の少年少女の背中に圧し掛かろうとしているのだ。

しかしロマニがこれほどまでに憔悴しているのは、それらが理由ではない。

この度の実験で仕込んだ“切り札”が呆気なく失われてしまつたことにあつた。

あの程度の炎でそれを殺すことは不可能であろうが、今のところ2人の人間以外に生体反応は確認されていない。一体どこに行つてしまつたのか。もしかして何らかのアクシデントが生じて、本体へと還つてしまつたのか。そうなればこの実験自体がロマニにとつて失敗となる。それほどまでにロマニにとつて“切り札”は重要な意味を持つていたのである。

「君は、いつたい何処に——」

ロマニの唇からため息と同時に呟きが漏れた。

するとその時、コンコンコンと扉をノックする音が聞こえてきたのだ。

慌てて起き上がつたロマニは、態勢を整えると入室を許可する。

「失礼します、Dr. ロマニ。

……大丈夫ですか？

あまり顔色がよろしくないようですが

「ああ、問題ないよ。

ありがとう——エフィアくん」

机に突つ伏したロマニの背後からカツンカツンという高い音が近づいてきた。

それは固い床とヒールがぶつかる音で、カルデアに残つた職員の中でヒールを履いた

女性といえば、ロマニには1人しか思い浮かばなかつたのである。その名を口にする
と、どうやら正解であつたようだ。

ロングタイプの白衣を翻して姿を現したのは、これまたうつくしい女性であつた。
薔薇を想わせる髪色に花弁のような唇は、少し微笑んだだけでも妖艶さが香り立つよ
うだ。二重のぱつちりとした瞳は光に当たると僅かに桃色を帯びる。

「（ご）無理をされては体に障ります。

少しお休みください、ドクター。

あとはこのエフィアにお任せを』

「……あーもうちょっとやらせてくれるかい？

どうしても気になることがあるんだ」

「それは、どのようなな？」

「君に言うようなことじゃがないよ。

僕がただ気にしているだけの、何の根拠もないことだ」

「……聞かせてはくれないのですね」

「そんなに大層なものじやないからね」

憂いに濡れた瞳がロマニを見つめる。その異性の本能を擗る眼差しは彼女の武器と
いえよう。エフィアと名乗つた年若い女性は、あらゆる部門の秘書兼サポート役として

活躍する才色兼備で、カルデアの立て直しにも惜しみない尽力を注ぐ人物であった。

ロマニは、自分を心配するエフィアに微笑むとやんわりと申し出を断つた。

彼が気にしているのは一言でいうと私情である。この忙しい中、私情で有能な部下を巻き込むわけにはいかないと考えたのだ。

「かしこまりました、D.r. ロマニ。

存分になさってください。ですがこれ以上の徹夜は許容できません」

「ああ。わかつたよ。

じゃあ……あと3時間ほどしたら代わってくれるかい？」

「ええ、よろこんで。それではまた」

物腰柔らかく嬌やかな口調でエフィアはそういうと、優雅に一礼をして踵を返した。見た目は色鮮やかな女性だが、その内面はとてもやわらかくできている。上品なうつくしさと存在感は、ただそこに立つだけで一厘の花となる。その姿は擦り減った職員たちを癒し励ますのだ。疲れている顔など一切見せず、サポートに奔走する姿に“女神”を見るものも少なくはなかつた。

「……」

彼女が去つたあと、ロマニはひたすらに思考を回すことに没頭する。
そうして思考の海へと沈んでいった彼は、気づくことはなかつた。

——その後ろ姿を薔薇の瞳がただじいと見つめていたことに。

◇*◇*◇*◇*◇

「——はあつ!!」

「つと、あぶないな」

飛び交う矢の雨の中を2つの影がひらりひらりと踊る。

弓には剣を、剣には弓をぶつけ合いせめぎ合う2人は、降り積もる雪を踏み締めてひたすらに交差する。

偶然かそれとも必然か、奇しくも互いの得物は同じであつた。

違いを挙げるとすれば、積み上げた経験か、持ち得る技術か、それとも生身の人間か、それを超越した存在であるか、であろうか。

少年の体中には細い傷が刻まれていて、赤い外套のサーヴァントには傷1つ見当たらなかつた。

「……っ、は、……やはり、キツイな」

空中で身を翻し着地をした少年は、滴る汗を拭い荒い息を吐いた。

ふわりと軽く着地を決めた英靈は、平然とした顔で少年を見下す。

「ふん、中々粘るじゃないか。

だがそれも終わりか」

「は……。ははつ、」

「……？ 何を笑う？」

「ああ、まあ、こちらのことさ。

肺が擦り切れるような痛み、傷を負う痛み、生死のせめぎ合い……。

ふふ……久しいものだ」

白金の髪をくゆらせて、ローズピンクの光が増した。

そんな少年の姿を見てサーヴァントは眉をひそめる。

致命傷こそ喰らっていないが時間の問題であろうほどに、追い詰められて見える少年は、不気味なほど調子を崩さないのだ。サーヴァントとの差は明らかでもはや虫の息ともいえる彼は、追い詰めれば追い詰めるほど、傷つければ傷つけるほど、その輝きを増していく。もしやこの少年は、戦いの中で成長するタイプの人間であるのかも知れない

と、サーヴァントは微かな危惧と苛立ちを憶えた。

サーヴァント自身もその感情の理由はわからなかつたが、ふつふつとこみ上げる苛立ちを抑えることはできなかつたのだ。立ち上がる1人の少年。瞳に輝く光は諦めも恐怖もない。立ち向かうものの目であつた。唇を噛み締めたサーヴァントは手にした剣を再び構える。人間相手だと慢心していたわけではないが、そろそろケリをつけた方が良いと判断を下して小さく息を吸つた。合わせるように、サーヴァントの目の周りの鱗が音を立てて広がつていく。

「遊びは終わりにしよう。

トレイス・オン
投影、開始……っ！」

夫婦剣が少年目掛けて投擲される。

愚直なまでにまつすぐ飛んできたそれを、軽い身のこなしで少年は弾いた。
だが――。

『
　　鶴翼しんぎ
　　欠落むけつにしてばんじやくヲ不ラズ』

「なに……っ」

躰したすぐ先に、その赤は出現する。

『心技、泰山二至リ』

『つち、』
『心技、黄河ヲ渡ル』

「あああっ!!」

首を狙つて振り上げられたもう一対の剣をいなそと少年も剣を握つたが、サーヴァントの方が早かつた。確かに正面から攻撃はギリギリ避けられた。しかし返つてきた一対目が、少年の死角を突いたのだ。反応しきれなかつた少年の背中に、深く、深く、突き刺さる剣。だが止めを刺すための追撃は止まない。

『唯名、別天二納メ』

「つ、……」

『——両雄、共二命ヲ別ツ』

先に投擲された1対の剣がサーヴァントの持つ1対の剣と引き合い少年を挟み込み、前後から切りつけた。サーヴァントの最初の攻撃こそ避けられたが、背中に走った強い痛みに呻いた隙を突かれ連撃を許してしまう。飛び散る血と滴る血が、石畳を濡らした。

ぐちやり、と、何かが潰れた音がした。

サーヴァントの剣が、少年の胸に突き立つたのだ。

肉を裂き、骨を断つた音か、人間の心臓コアの潰れる音か、少年には判別はできなかつたが、それが致死の傷であることは理解できた。

ずるりと、剣が抜かれ少年の体は石畳に伏した。

雪に溶ける白金が、赤く、赤く染まつていく。

「……せめて、」

投影した武器を消したサーヴァントは動かなくなつた人間を見下げると、静かに目を閉じた。それは黙祷のようにも、懺悔のようにも見えて。次々に降り注ぐ白に、広がり続ける赤が染み入り、穢れに満ちた寺を飾り立てていった。

暫くして、サーヴァントはゆっくりと踵を返していく。
サーヴァントはまだ己の役目は終えていなかつたのだ——。

——ぱちや、

「?」

微かに聞こえた水音に、サーヴァントは振り返ると同時に剣を手にした。が。

「がっ!!あああああっ!!」

サーヴァントが動くよりも早く、それは飛來した。

どん、という衝撃。右目に走つた熱。焼けつくような痛み。

サーヴァントの体が弓なりに仰け反り、その手が右目を覆う。

ぱたぱたと滴るのは、先ほどまで少年の体を染めていたものと同じ。

「ば、……か、な、なぜ……？」

「……」

「な、ぜ……、たち、あがる？」

「……」

「心臓は、つぶした……はず、」

「最初から、お前に勝つつもりはなかつた」

「は……？」

「いくら俺でも、この体でお前を相手取るのは不可能だ。^{むり}

だがここで消えるわけにはいかんしな。

それに、お前のその目も、弓も、気に入らん」

はあ、とため息を吐いた唇からは、まだ鮮血が溢れ返つてゐる。ペッと吐き出すと地面に赤い花が咲いた。いつの間にか立ち上がつていた少年は、手にした弓をそのままに

サー・ヴァントへと近づく。心臓を潰した人間が立ち上がったことに驚いていたサー・ヴァントは、少年の持つ“蒼い弓”を目にした途端、ぴたりと動きを止めた。

驚愕がさらなる驚愕に染まり、ふと力の抜けた体が地面へと落ちる。

石畳の上に尻もちを付いたサー・ヴァントは、心底信じられないという表情で呆然と少年を見上げた。震える指先が、少年へと向けられる。

「——つ、あ……」

「本当は両目をと思ったが、まあ良い」

「あ、……ああ、……そん、な」

「この体を傷つけた罰は重いぞ——なあ、シロウ」

白金の髪は、青緑のそれへ。

ローズピンクの瞳は、髪と同じ色へ。

まだあどけなさを残す少年の体は、精悍な青年の体つきへ。

——月が姿を変えるが如く、その体は形を変えた。

良く知ったその姿に、存在に、瞳を揺らしたサー・ヴァントへと、それは微笑むと彼と同じように手を伸ばす。そしてその白い指先が、サー・ヴァントの右目を射抜いた矢に触れたかと思うと。

「つ、ひ……!? うああっ！」

「呻くな、情けない」

「ずぶん、と生々しい音を立てながら引っ張られた矢。矢先に連なるのは小さな玉。玉に付随する筋のようなものに構わずそれを抜くと、ぶちぶちと何かが切れる感触が響く。」

摘出したそれは真っ黒に黒ずんでおり、汚らわしいとでもいうように見ると、ぽいと投げ捨てた。

「ぐうう、」

「少しは正気に戻つたか？」

「……つ、ぐ、……俺は、はじめから」

「ほう？ 初めから正気であつたと？」

「……せ、……せん、せい」

力任せに眼球ごと矢を抜き取られ、通つている神経群を引き千切られたサーヴァントは当然ながら痛みに悶絶をする。それを口元に笑みは浮かんでいるものの全く目が笑つていないと、サーヴァントにとつて死の宣告にも等しい意味を持つ顔をした男は一蹴した。

「お前からそう呼ばれるのは、随分久しいな」

「つ……なぜ、……貴方がここにいるんだ!!」

それに、なぜあんな姿を……!!」

「まあ落ち着け」

「落ち着いていられるかつ……!!」

「落ち着けと俺は言つた筈だ、エミヤ」

「……！」

右目を抑える指間から血が滴るが、構いもせずサーヴァントは少年の姿をしていた男へと掴み掛らんばかりの勢いで詰め寄つた。

ソラスハは面倒くさそうに片目を閉じると、エミヤを一瞥する。

「質問するのは俺だ、良いな？」

「……承知した」

「ふふ。やけに素直じゃないか」

「今回のは、その……俺にも、非がある」

「非があるというのは？」

「……。貴方の、正体を見破れなかつたことだ」

「ははっ、それは当然だろう。

「たとえ冠位のついた魔術師であつても、こればかりは見抜けまい」

「……？」

「この体は人間そのものを素材としている。

今の俺に魂は創れないからな。

空いた魂の部分に、俺の意識を詰め込んだんだ」

「……つ、それ、は……！」

「生贊というわけか……!?」

「あー待て待て、それは誤解だ。

この体は俺が殺したわけでも、生贊に捧げられたものではない。

奪つた、という表現が正しいか

「……どういうことだ、師匠」

エミヤの疑問は最もである。

なぜ光の国にいるはずの師が、こんな特異点のど真ん中にいるのか。
しかもなぜか人間の体を使つて、完璧に人間と同化しているのだ。
おかしいを突き抜けて、ついに頭が狂つたのかと思つてしまふ。

エミヤはソラスハの放浪癖を知つていたし、暇にさせておくと碌なことが起こらない
というのは身をもつて体験済みである。だから百歩ちょっと譲つて、このような特異点
をふらついているのは理解できないが、まあわかる。だが、人に扮している点について、
突っ込まずにはいられなかつた。

「色々あつてな。マスターとしてレイシフトに参加したんだが……。

ちよつとばかりエラーが起きて、この人間はそのエラーで死んだ。

……。それは別に良い。誰にでも起ることだ、若人にも老人にも等しく訪れるもの。

だが、少し……気になることがあつてな

「気になること……？」

「……いや、ここで話すことではない。

それよりもお前はどうする」

「……俺、は」

エミヤから視線を逸らすとソラスハは腕を組み、大雑把にあらすじを語った。ソラスハは少年——レイの姿をとつていた理由をエミヤに明確に伝えなかつたが、彼なりに思うことがあつてのことであつた。

遙か昔より、光は生命の誕生の象徴で、影は生命の瞑目の象徴^{イメージ}が定着している。故にその概念は光の化身であるソラスハと、影の化身であるスカサハにも投影され、2人は決して相容れることは許されない存在となつた。

——ソラスハは死に触れてはならない、スカサハは生に触れてはならない。
ソラスハが亡骸に魔力を注ぎ込むと、形を取り戻した心臓が脈動を始める。

ソラスハが肉体に靈氣を吹き込むと、氣を取り戻した意識が覺醒を始める。だが、『今の』ソラスハに彼の魂を戻すことは、できない。

これで体は歴とした人間で、その意識だけに宿ることに成功したのである。ソラスハの思惑は彼の沈黙を以て秘された。だが、1つ言えるのはこれは決して正体がばれることがないように、と念に念を押しさらに圧を掛けて来た友人のためだけではないということである。

言葉を濁したソラスハに物言いたげな視線を向けていたエミヤは、続いてなされた問い合わせに動搖を見せる。

「……俺の使命は、ここなの」

「なんだ、まだ正気ではなかつたのか？」

「い、いや……つ。だが、俺は聖杯によつて歪められたサーヴァントに過ぎない。正当なサーヴァントではないといった筈だぞ」

「ほう？ 聖杯とはそのような力も持つのか。
どれ、ちょっと弄つてやろう」

「は……!? ま、待つてくれ、ししよ、」

「ふむ？ これはこれは、ひどい呪いを掛けられたものだ。

お前自体が楔か、いや、違うな。守護の命。神に類するものからの。

奴らも随分好き勝手してくれるじゃないか』

「……師匠」

「ははっ。わかっているさ。

俺はお前の生き様に口を出す気はない。

……手は出すがな」

「?」

ソラスハはエミヤへと手を翳すと、魔力マジックを巡キヤンらせた。

レントゲン検査にも似た行為により、ソラスハは目の前のエミヤの存在を改めて確信する。どうやら腹に一物抱えているのは彼だけではないらしい。

師弟揃つて同じことをしている、と呆れた顔をしたソラスハはぱちりと指を擦り合わせた。

「厄介なものを背負わされたものだ。

しかも、お前は黙つてそれを受け入れた。

……いや。いい。何も言うな。

今のお前を責め立てようと、お前の在り方は何一つ変わることはない。

だがな。どうせ消える運命にあるお前を、どう扱つても構わんだろう?』

エミヤに力と、祝福を与えた存在として、ソラスハは織り成すいくつもの運命の根源

に関与していた。しかしそれ以上でもそれ以上でもない。たとえその気にさえなれば、彼を縛り囮うすべてのから解き放つことができようとも、ソラスハはただ傍観者で在り続けることを選ぶだろう。

「エミヤ。この際お前の事情はどうでも良い」

「……隅々まで視られた挙句直球ストレートに言わされると、リアクションに困るのだが」

「だが、お前は俺の事情に付き合う理由があるう？」

「心当たりがないのだがね……！」

「ははっ、俺の秘密を知つてしまつたからにはそうはいかんよ。

それにまだお前の修行は終わつていない」

「……！」

当然のように言つてのけた師匠に、弟子は頬を引き攣らせた。

王としての気質か、それとも性格の問題かはわからないが、ソラスハは無意識に無茶ぶりを仕掛けてくることが多々あり、それに巻き込まれるのはいつだつて彼が認めたものたちである。師は人の心を解きないのだろうかと頭を抱えた記憶は、エミヤにとつて古くも新しい。

エミヤにとつてソラスハは、のちの口伝に優れた人格者のような感じに伝えられていることを知つた時には、絶句を通り越して発狂しそうになつたくらいに、あらゆる意味

でインパクトに溢れた師匠でもあつた。

「……はあ。貴方はいつだつてそうだ、我が師ソラスハよ」

「ふふつ。精々このような師を選んだ自分を呪え」

「いや、呪わんよ。勝手に付いていくと決めたのはこの俺だ」

エミヤの中でやつと動搖の波がおさまつた気がした。

どんな無茶を仕掛けてこようとも、いつだつて自分を導いてくれるのはこの師なのだ。いつ如何なる時であつても、その教えはエミヤという存在の根源に染み付いている。

エミヤはソラスハを見据えた。

右目の痛みも、動搖も、すべて飲み込み静かに向き合う。

「こんな形なりだが、俺を使つてくれるか？」

……我が師マスターよ」

「俺は別に、形を求めたわけではないのだが」

「いや、中途半端は良くない。

俺はあなたに力を貸すと決めた。ならば、契約を求めるのは当然のことであろう？」

「……まあ、そうだな」

覺悟を決めた様子の愛弟子を、ソラスハはそれ以上拒否することはできなかつた。

迫るもの

果てない砂漠を住まいとするものたちに紛れ、彼らもまたそこを拠点としていた。

時折吹き荒れる風に、稲穂が揺れるよりも激しく黄金の海は波打つ。食料のみならず水も乏しいそのような場所を拠点にしたのには、いくつか理由があるのだが、一番大きな理由は“人目がないから”であろう。それにそのような場所だからこそ、凶暴且つ強靭な生き物が多くいる。ソラスハはともかくとして、エミヤは生身の人間であるため食料や水分の確保は必要不可欠となるので過酷な修行に耐えつつ、それらを確保していくかなければならない。幸いなことに、エミヤは結構な調理スキルを所持していた。今までの経験の中で獣を捌くことにも慣れていたし、サバイバル生活もとっくに身に付いていた。

それでも、次から次へと続く試練に日々限界まで擦り減らされる精神と肉体は、限界という言葉をとう飛び越えた。余裕を持つことすら許されず、次々と課される無理難題に苦痛を通り越して悦楽を感じるようになつてきたとき、柔い少年は屈強な青年へと姿を変えていた。

「師よ」

「ああ、もう終わつたのか?」

傾く夕日に照らされた砂の海が、きらきらと金色に輝く。神殿跡地に残る瓦礫の1つに腰掛けたソラスハの前に、灰白の短髪の青年は静かに片膝を付いた。ゆるりと視線を移したソラスハは表情を和らげて問う。

「師よ、次を」

「……勿論だとも。だが何度も言つているが、お前は人間だ。

少しばかり休むといい」

「必要はない。だから」

「ふう、お前は本当に聞き分けのないな。

仕方あるまい。これも俺の慈悲よ」

——柔らかな微笑。のち鮮烈な衝撃。

「うぐあつ!!」

ソラスハは赤いローブを翻し飛び降りると、その勢いで拳を弟子の腹にめり込ませた。

予備動作もなく打ち込まれたその一撃に反応することのできなかつた弟子は、小麦色の砂へと倒れ伏す。弟子が恐る恐る顔をあげると、そこには穏やかな微笑を浮かべる師匠はんにやがいた。思わずエミヤは目を逸らそうとするが、それが火に油を注ぐ行為になり兼

ねないのを思い出し、慌てて青緑の瞳を見上げる。男にしては細身にみえる体には、鍛え抜かれた筋肉がちゃんとついており、そこに有り余る魔力を乗せて放たれる拳は岩だろうが鉄だろうが結界だろうが有無を言わさず破壊するのを知っていた。

そんなソラスハの拳を受けても、エミヤが砂にめり込むだけで外傷はないのは、物理的な教育方針の賜物といったところだろうか。修行のおかげというには迷うところだが、咄嗟に張った防御魔術は、無残に碎け散つたものの被ダメージ減少に貢献してくれたらしい。

「ふむ。反応はいいが、発動が遅いな。

それになによりも脆すぎる」

「い、いやそれは、貴方の力が

「ほう？　言い訳か？」

たとえ俺の力が強くとも、それを防ぐのが目的だろう。

人の弱き体を守るためにものが、簡単に壊されてどうする

「そう生き急ぐこともあるまい。

いくら人間の生は朝露の如くとはい、焦りは露みのりを落とすだけだ」

「だが……俺はっ！」

「休むといい、シロウ。

「お前の望みを叶えよう」

ソラスハの痛恨の一撃は、永眠してもおかしくはない威力であつたが、おかしな方に昂つていた身体が、焦燥に駆られた心が、不思議と凧いでいくのをエミヤは感じた。こう表現すると彼が被虐趣味(マゾヒズム)を発症しているように聞こえるだろうが、そうではなく、ただ単に陶酔状態となつていただけの話である。がくりと、急激に体の力の抜け、意識と共に落ちていくのを感じて、エミヤは目を閉じた。そして、懐かしいその名を、やさしい音色で紡がれたからだろうか。どうしてか、泣きたくなるほど心が震えるのが遠くに感じた。髪に触れる優しい手が、いつかの誰かと重なつた気がした――。

「……う、」

懐かしい記憶に抱かれた目覚めは優しいものであつた。ずきずきと痛む腹痛を除けばの話だつたが。己の奥底にこびりついて離れない記憶のうちの一つは、こうして気ま

ぐれに姿を見せてはあつという間に消えていく。『我が師らしいな』と何度も目覚めた先で呟くはめになつたことか。

今回もまた、その幾度目かを繰り返すのだろうと重い瞼を開けると、そこには夢の残り香があつた。

「……、」

夢の続きをと思わず微睡みかけた、——が次の瞬間跳ね起ることになる。
全身を駆け抜けたあまりにも冷たい『それ』に、体が反応したのだ。

ぶるりと震え上がつた体を押さえると何事かと周囲を見回す。弓兵としてなんとも情けないことだが、俺はこの時初めて自分が置かれている状況に気付いた。

片目で見る世界はいつもの半分程度で、慣れない視界に頭が揺れるのを振り払う。どうやら自分は、寺の境内の中心に伏せていたらしい。何故か己の周りには、大穴が空いていて陥没した地面の一番深いところに立つてゐるようだ。

「し、いや……マスター！　これは一体……！」

落ち窪んだ底から、穴の淵に腰を掛ける人影へ声を飛ばす。

睥睨する2つの目は記憶のものとは違う。違うといつてしまえば姿かたち全て異なるが、それでも尚、纏う輝きは消えない。もう1つ言うのならば、その性質に関しても何1つ変わりがないようで、安心した。

「漸く目が覚めたか。この俺に番をさせるとは、お前も成長したものだな」

やれやれと言わんばかりに肩を竦めながら、なんとも高慢な言い回しで我が師——ソラスハはそう口を開いた。揶揄うような口ぶりだが、実際にその目は笑つてはいない。普段は静かな水面の如く穏やかであるからこそ、獣を思わせる鋭さと激しさの宿る瞳を見ると、余計体が竦むのだ。これが今までの経験から来るトラウマというもののなのだろうか。勘弁願いたいものである。

「す、すまない」

「ははっ、冗談だよ。相変わらず真面目だな。

捻くれ過ぎたカタブツは死んでも治らなかつたか」

「つ、」

「いいか。俺は弟子おまえに従順さを求めた憶えはない。

寧ろ強気ものに喰らいつく程に獰猛であれ、蛮勇であれと教えた筈だ」

「ああ、もちろんだ。

貴方の弟子を名乗る以上、この体は心は鋼鉄と同義」

「ほう？ 口の割には無様なことになつてているじゃないか」

「……それは」

月の光で編み込んだ糸のような髪がきらきらと輝き、その眩しさに思わず目を細め

た。少年の形^{なり}に似合いの表情で悪戯に笑つてみせたソラスハは、ころりと顔を変える。それこそ俺のよく知る師の顔であると同時に、俺がこの世で最も畏怖するものであることは、この際認めよう。

とはいえ、まだ完全に無表情となつてゐるわけではないので、手^ガに負^チえない状態ではなさそうだが、導火線は相当短くなつてゐるらしい。

「はあ、言う気はなかつたが……どうも腹の虫が治まらん。

俺はなシロウ。お前が俺の許可なく、勝手に、よりもよつて“影”に染まりやがつたことに腹を立ててゐるんだ。しかもお前はそれに抗うこともせず甘んじて、結果的にコレだ」

「だが師よ！俺とて甘んじていたわけでは……」

「——あ？」

「すまん」

少年は不思議そうな顔をしつつ小首を傾げた。それはとても年齢相応のものに見えて、“仕草だけみれば”微笑ましいとすら感じるものだ。しかし、今、少年は少年ではない。彼の中にはいる“もの”をよく知つてゐるからこそ、さつと血の気が引いていくのがわかつた。

ふつりと、沸く怒りの鱗片を目の当たりにし、俺の口から反射的にこぼれたのは、ス

トレートな謝罪の言葉一つのみ。

「……はあ。『蒼い弓』を誇りと呼ぶのであれば、いい加減その自虐性をどうにかするんだな」

深い溜息を吐いたソラスハの目は、怒りを通り越して呆れに変わった。ぴりぴりと肌を刺していた圧が抜けて、無意識に詰めていた呼吸を久方振りに取り戻す。

この師匠は何処までも理不尽で、何処までも無茶なヒトであるが、その目に宿る慈悲の光はとても深い。しかし、ひとつ致命的ともいえる欠点があることを、俺は長い修行の中では知つた。それは――感情の抑揚が極端に浅いことにある。

分霊として降りて來てるからか、それとも元々の性質か、残念ながらそれを確かめる術はないが、おそらく、中途半端に人間の心を解するが故に、意味を解さない時があるのだ。

「ん？ なんだ、その顔は」

「いや、……なんでもないさ、マスター」

「そうか？ えらく気の抜けた間抜け面をしていたが。

全く、俺が――。いや、俺が、何だつたか」

ふと我に返つたように、目を瞬かせた師は、今度は本当に不思議そうに首を傾げた。遥か昔、このひとのもとで修業をして來た時もこういうことは多々あつた。

感情で動き出したかと思うと、ふと我に返つたように止まる。初めは記憶障害でもあるのかと思ったがそうではないらしい。聞き出そうとしたが、呪いのようなものだと曖昧に濁されてしまつたため、すべてを知ることはできなかつたが。

今更それを気にする気はない。

何故ならば、たつた今師が“忘れてしまつた”“感情”はあらから理解しているから。

口に出さずとも、いつだつてこの師は――。

「ふつ。感謝する、師よ」

「……馬鹿な弟子の不始末を片付けるのも、俺の仕事だと教えたのはお前だろう」

「ああ、……そだつたな」

浮かべられた懐かしい笑みに、つられるように笑う。

師匠の一矢により“取り戻した正氣”と、“失つた片目”。天秤が傾いた結果得られたものは、いる筈のない師……いや、マスターであつたとは。これが不運か幸運か、それはわからない。だが、恐るべし師匠効果といったところか。聖杯の汚泥と、“この地に君臨するもの”的力を跳ね退けた身体を、新たな魔力が巡つていくのが、こそばゆくもあたたかかつた。

「頭が冷えたなら良いさ。次は、目ではなく心臓を射るがな」

「ああ。……次はないよ、この蒼穹の弓に誓おう」

軽快に笑いながら告げられた言葉は、決して冗談で済むものではないだろう。穴の淵から立ち上がったソラスハに合わせ、穴の底を蹴り上げると少し後ろへと着地する。

並び立つにはまだ遠い背中は少年のものとなっているが、俺の目には変わらず大きいものに見えていた。

「さてと。予想以上に時間を食つてしまつた」

「これからどうするつもりだ？」

「この特異点を攻略するなら——」

「いや、それは俺の仕事ではないよ」

「は？」

「ふふ……。王道をいくものはもう決まつているようだ。

俺のようなぱつと出は、主人公が拾い落としたものを集めていくのが精々さ」

「……要するに、貴方は正当な方法を取る気はないと？」

「違うな。そもそも目的が違う。

まあいつかお前にも話す時が来るだろうよ」

からからと声を立てて笑うソラスハは、今ここで深くを語る気はないようだ。

それならそれで良い。師曰く、"俺にはマスターに付き合う義務がある"らしい。ならば見極めようじゃないか。

——この自由奔放な光の化身が、何を成すために降臨したのかを。

◇ * ◇ * ◇ * ◇ * ◇

『やあ、リツカくん！ 調子はどうだい？

マシユも宝具を解放してから、異常はないかな？』

「ドクター！」

「はい。センパイも、私も異常はありません」

『どうか、それは何よりだよ』

何とか機能するようになつた通信は、不定期ながらも良いタイミングでやつてくる。

"あるサーヴァント"の力を借りてマシユの宝具を不完全ながらも解放した後、彼の導きのままに先へと進んでいた。戦闘の度に、マシユへと魔力供給をしなければいけないリツカを休めつつ、なんとか、一行は"先が見えないほどの長い石階段"の前に到

着した。

その時であつた。まるで見ていたかのようなタイミングで、通信機器が作動し、不鮮明なモニターにロマニの姿が映し出されたのである。前に見たよりもくたびれた顔をした彼は、リツカたちを労わるように明るい声を掛ける。

「報告します、ドクター。」

特異点の攻略の方は進んでいますが、その他の任務がまだ……」

『……ああ、わかっているさ。』

「こつちもそんなに簡単に——』

『Dr. ロマン。失礼いたします』

リツカたちが、この特異点で成さねばならないことは、特異点の攻略だけではない。レイ・アニムスファイアとの合流、そして他生存者の探索も任務のうちだ。しかしながら、彼ららはまだ生きている人間自身をこの特異点で目にしてはいなかつた。

ありのままを報告するマシューの顔は暗いが、ロマニにとつては想定内のことである。

彼は、そうだろうと頷くと再び口を開こうとしたが……。突然後ろから声を掛けられ悲鳴交じりの声を上げてしまう。

『うわあ……っ!!び、びっくりした……！
ど、ど、どうしたんだい？エフィアくん、』

『ふふ。お忘れですか、ドクター。

お話し中失礼かと思いましたが、3時間後に代わると約束した以上、守つていただきなければなりませんので』

『そういえば……そうだったね。

ああ、もちろん憶えていたよ。でも、もう少し……待つてくれると嬉しいんだけどな』

慌てて振り返ったロマニは、優雅に後ろに佇む1人の女性の姿を目にする。

彼の様子を見て、くすくすと上品に微笑んだエフィアは、まず己の非礼を詫びると、交代の時間であることをロマニへと告げた。早いもので、あれからもう3時間経過しているらしい。

エフィアはロマニから視線を外すと、モニターに映っているリツカたちを見た。リツカたちも突如として現れた、華々しい容姿の女性の姿に驚きを隠せない。

『あら、そちらが“最後のマスター”藤丸リツカさんですか。

このような可憐な方が……。ああなんて残酷なことでしょう。』

「あなたは……！エフィアさん……」

「え？ マシユ知り合いなの？」

「はい。エフィアさんは、様々な部門の管理官のような方です。
私も随分とお世話になりました。」

『あなたも無事で何よりだわ、マシユ』

「ええ、ご無事なようで安心しました」

エフィアはリツカを見ると、眉を下げて嘆いた。もちろん彼女も人類最後のマスターの話を聞いていたものの、実物を目にするとそう言わずにはいられなかつたのだろう。そんなエフィアにマシユが声を掛ける。生まれてからずつとカルデアにいた彼女は、エフィアのことも知つていた。マシユに対して様々な態度をとる人間がいる中で、エフィアは特別態度を変えたりはしなかつたのだ。いつも柔らかく接してくれるエフィアは、マシユにとつて姉のような存在でもあつた。だからこそ、無事でいてくれたことに、マシユは心の底から安堵したのである。

「……待ちなさい。

アンタ、今までどこにいたのよ」

『これはこれは、オルガマリー所長。

私は運が良かつただけですよ。

あなたもご無事とは余程、……いえ、失礼。

——あら？ いつもの坊やの姿がありませんのね』

「レイは今、任務中よ。すぐにでも合流するんだから」

『ふふ……。そうですか。

『……と良いですね』

「……それは、どういうこと?」

『あらあら、怖い顔。

確か貴女の弟さんは、先行したAチームだつた筈ですわ。

そしてAチームは、誰一人例外なく全滅した筈では?』

「……レイ・アニムスファイアがレイシフトされたのは事実です。

アンタ聞いてなかつたの? 死人がレイシフトなんて不可能なんだから

『ふ。……ふふ、ふふふつ……!! 本当に面白い方だわ』

「何がおかしいのよ!」

『いえ、失礼いたしました。

あなたは妄信的なまでに、弟の生存を信じていらつしやる。

……そして、自分のも』

「当然でしよう。あの子がこんなところで死ぬ筈ありません」

『ええ、そうでしようねえ』

口元にそつと手を添えて笑うエフィアを、オルガマリーは睨み付けた。

オルガマリーが所長に就任した時、エフィアはもう既にカルデアにいた。

彼女たちは、会議やらで何度か会話をしたことがあつたが基本的に馬が合わなかつた

のだ。

オルガマリーにとつてエフィアは“薔薇そのもの”であつた。

華かのじよ 華美な花の周りには常に人がいた。人を魅了する術を、熟知していたのである。

しかし、人が華に溺れても華が人に溺れることはない。彼女に近付き過ぎた人間は、鋭い棘の餌食となる。そのことを知つていたオルガマリーは、必要以上に彼女と関わらないようにと弟に言い付け、常に警戒していたのであつた。

「おい、姉ちゃん。……エフィアと言つたかい。

アンタなんか知つてやがんな」

『そちらは……。そう、サーヴァントね。

いいえ、私は何も知りませんわ。

ただ私にも大切な兄と、姉がいるものですから、所長の苦しみはわかるつもりですのよ』

モニターを覗き込むリツカたちから少し離れた場所で、静かに話を聞いていたサーヴァントが、訝しげにエフィアに問い合わせた。

エフィアは飄々とした態度を崩さなかつたが、そのサーヴァントを見た途端微かに顔色が変わる。動搖と呼べるその表情を、彼は見逃さなかつた。

『そろそろ時間のようですねわ。

さあ、ドクター。これ以上はいけません。

少しはお休みになつてください』

「……仕方ないなあ。

というわけだ、リツカくん。

少しの間彼女と代わるから、何かあつたらエフイアくんに言つてくれるかい?』

「あ、はい。わかりました」

「ごめんなさい、私つたら名乗りもせずに……。

エフイアよ、よろしくねリツカちゃん」

「は、はい……！」

話は終わりだと言わんばかりにロマニを急がせたエフイアは、最後にリツカに向かって微笑む。リツカは、薔薇色の唇がうつくしく弧を描いたのをぼんやりと見つめる。白い肌に薔薇色彼女の色は良く映えていた。

そうして、エフイアに促されるままドクターが立ち上がりと、リツカたちに向かつて軽く手を振つたところで通信は途絶えたのであつた。

「相変わらず、嫌な女」

「しょ、所長……。それは言い過ぎです」

「どうせ、アンタはあの女のいいところしか見ていないだろうけど……！」

さいつあくよ！サイアク！　まさに性悪の女狐だわ！」

額に青筋を浮かべて歯を噛み締めるオルガマリーは、苛立ちを隠そうともせずに悪態を吐く。慌ててマシユがフォローを入れようとするが、余計油を注ぐだけに終わつたらしい。

そんなように、通信が切れるとすぐに三者三様の言葉が飛び出すのを聞いたリツカは、苦笑いを溢した。彼女にも、あのエフィアという女性がマシユには優しげな態度をとつていたが、オルガマリーには棘があつたように感じられたのだ。

「……エフィア、ねえ」

ぽつりと呟かれた言葉は、誰にも聞かれることはなく消えていく。

ちらりと3人の背中を見た赤い瞳は、意味深に閉ざされる。

オルガマリーを宥めながらリツカは、エフィアの顔を思い浮かべながら、カルデアの数少なくなつてしまつた職員の1人で、味方であるのだからそう邪険に扱うことはないだろうと心の中でそう呟いた――。

そうして一行は、再び進み始めた。次の目的地に辿り着くための石階段は目前に迫つていたが、此処に来て敵の襲来が一気に増加したため、中々辿り着けないでいた。

とつぱりとした重々しい黒の空のもと、少女たちはひたすらに足を進める。襲い来る敵を、動きにキレが増した彼女のサーヴァントが打ち碎く。とはいえ“盾”というものは、やはり守りに特化したものである。その攻撃は敵の動きを止めても、息の根を止めには至らない。董色のサーヴァントはそれを冷静に見極めると、後ろへと下がつた。すると同時に、唱えられた“炎の魔術”が降り注ぎ、敵に止めを刺す。

「ふう、やれやれ。こんな奴ら槍があれば一撃なんだがなあ」

くるりと木製の杖を回して、肩に担いだ青色の男は溜息を吐いた。

魔術師のような出で立ちのそれは、先ほど大勢の敵に囲まれたりツカたちを助け、ついでとばかりにマシユに戦い方や宝具の使い方を教えた男である。

曰く“はぐれのサーヴァント”らしいが、この特異点のことも良く知っているようで、今現在リツカたちが向かっている場所も彼によつて提案されたものであつた。

「へえ？ 相変わらず引き籠つてやがんのか」

「キヤスターさん、お知り合いなんですか？」

「あー。ちいと縁があるだけさ」

その場所へと近づけば近づくほどに、身に感じる魔力は強くなつていく。

周りには白い雪が積もつてることから、つい先ほどまで雪が降つていたことが伺えた。リツカは思わず身を震わせる。マシユはデミ・サーヴァントとなつた影響で、暑さ

や寒さといった環境によるダメージは受けにくいらしいが、袖なしの服から覗く細い腕は、見るからに寒そうである。幾分か明るい顔をした相棒は、キヤスターと呼ばれた青髪のサーヴァントに自分が充分に戦えるといわれてから、調子を取り戻したようだ。やはり戦い方を知らない彼女だけしか、戦う術を持たない状況は辛かつたのだろう。そう考えると、あの場でキヤスターと会えたのは不幸中の幸いというやつだつたのだろうかとリツカはぼんやりと考えた。

「（ご）ほん！ なにぼーっとしてんのよ！」

マスターとはいえ貴女はまだ見習いも同然なんだから、気を引き締めて頂戴！」

「は、はいっ！ あの……所長」

「なによ」

「所長の弟……レイさんって、どんな人ですか？」

「貴女……！」

「ひ、ひえ……っ！」

「ああ、でも、そうね。

藤丸リツカ……。貴女はずつと一般の世界で生きて来たから、知らないのも今回ばかりは許しましょう

「あ、ありがとうございます……？」

リツカたちはオルガマリーとロマニによつて告げられた任務をこなそと奮闘して
いたが、レイ・アニムスファイアの動向は全くといつて良いほど掴めていない。この特異
点に足を踏み入れてから生きている人間を1人たりとも見ていないのだ。

リツカは、レイ・アニムスファイアの名は何度も聞いていたが、その人間がどういう人
間なのか少しも知らないことに気付いて、ふと疑問をそのまま口にしたのである。……
途端に恐ろしい顔をしたオルガマリーに詰め寄られ、怒鳴られそうになつたが。
地雷を踏んだと、顔を蒼白にしたリツカであつたが、深い溜息と共にオルガマリーは
腕を組むと、ぱつりぱつりとレイ・アニムスファイアについて話し始めた。

「レイは、アニムスファイア家の史上最高にして、最低の才能の持ち主よ。

魔術回路、魔力、知識、どれをとつても最高級。正直私よりも、アニムスファイア家当
主の肩書が相応しい人間だつた」

「え？……でも、所長は」

「ええ、彼には致命的な欠点があつたのよ。

たとえどれだけ優れた魔力を、魔術回路を持つていたとしても“使えなければ”意味
がない。

レイは“魔術”を使うことができなかつた

「……魔術を」

「そう。その代わり武芸に才能があつたから、用心棒としてアニムスファイア家を、いえ私をずっと支えてくれた。彼、知識もすごいのよ！ 彼には、あのレフも相当な期待をしていたの」

「レフって、あのレフ教授ですか？」

「ええ。私はあまり関わらなかつたけど、レイは懐いてたみたい。

といつても人懐っこい子だから、誰にでもああだつたけどね」

オルガマリーは、段々と表情を緩めていった。それは彼女の姉としての顔なのだろう。彼女のずっと張り詰めた顔しか見ていなかつたりツカにとつてそれは、ひどくあたたかなものに感じた。それだけ弟の存在は大きく、大切なものだということだ。

早く会わせてあげたいと、リツカは強く思つた。自分はマシユやロマニなど失うことなく、今この場にいる。もしあの場に家族がいて、爆発に巻き込まれたとしたら……。想像するだけで身が凍つた。

「ちよつと、なんて顔してんのよアンタ。

レイは大丈夫よ。だって、この私の弟なんだから」

リツカの顔を見て、何かを察したのだろう。オルガマリーは胸を張つて微笑んだ。

彼女に搖らぎは1つもありはしなかつた。レイ・アニムスファイアがこの特異点で生きていて、必ず会えることを絶対的に信じていたのだ。リツカもまた、そんな彼女の強さ

に胸を打たれる。

「所長……。私も、私も頑張ります！」

「それは当然です」

そう言つて両手を胸の前で握り締めたりツカに、オルガマリーはびしゃりとそういうと、呆れたように笑つた。短時間ながらにもリツカという少女の底抜けの明るさに、マシユをはじめオルガマリーも助けられていたのだ。

絶望が絶望を呼ぶ状況で、決して折れない少女の心を、彼女は認めていたのかもしない。何もかもが素人丸出しの一般人だと、見下げるような感情はもうどこにもなかつた。

「ほら、さつさと行くわよ」

「はーい！」

「あっ！先輩……！待つてください！」

切り開いた道をまっすぐに進んでいく彼女らの背中には、もう絶望も不安の色もない。

先を歩み始めたその背中たちを見て、キヤスターは目を細める。

——彼の赤い目は何処か暗い色を宿しているようにも見えた。